

史跡 齋宮跡

令和3年度発掘調査概報

2023年3月

齋宮歴史博物館



第200次調査 調査区通景（南東から）



S B 11360（南西から）



3区 調査区全景（東から）



3区 調査区全景（北西から）

序

令和3年度は、飛鳥時代の齋宮中枢域の実態解明を目的とした調査の5カ年目にあたり、飛鳥時代の中枢域と推定される施設の詳細が明らかになりました。これらの成果は、地域の皆様のご理解とご協力があったからこそと改めて感謝申し上げます。

さて、今回報告する第200次発掘調査は、齋宮の成立にかかると実態を解明するため、史跡西部の中垣内地区で行ったもので、飛鳥時代後期の掘立柱塼により区画された施設の構造について、より詳細な状況が判明しました。特に、区画内で最も重要な建物である正殿は、建物の南北両面に廂が付く、格式の高い建物構造であることが確認できました。また、区画の西側では、掘立柱塼に四脚門が取り付く構造も確認できました。これは、飛鳥時代の齋宮を考えるため、また今後、周囲の発掘調査方針を考えるための大きな成果とも言えます。

これらの調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。さらには、全国で唯一無二の遺跡となる齋宮跡を体感できるサイトミュージアムとして、国内を問わず海外へも視野を向けて、よりいっそう魅力ある活動を続けてまいります。

史跡齋宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、齋宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2023（令和5）年3月

齋宮歴史博物館

館長 大西 宏 明

例 言

- 1 本書は、齋宮歴史博物館が令和3年度に国庫補助金を受けて実施した史跡齋宮跡発掘調査（第200次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う「史跡齋宮跡 令和3年度現状変更緊急発掘調査報告書」（第201次調査）は、令和4年度に別途明和町が刊行する予定である。
- 3 調査区の表示方法（6 A F 9 ~ 10・G 10）は、齋宮歴史博物館2003「史跡齋宮跡 平成13年度発掘調査概報」による。
- 4 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。
- 5 齋宮跡の遺構・遺物の時期区分は、齋宮歴史博物館2019「齋宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編」に拠るが、飛鳥時代の土器編年は、西氏の都城編年を基準としつつ奈良文化財研究所・歴史土器研究会の資料集を参考とした。弥生土器の編年は、石黒氏・宮腰氏の論文を用いた。
西 弘海1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
奈良文化財研究所・歴史土器研究会2019『飛鳥時代の土器編年再考』
石黒立人・宮腰健司2007「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会
- 6 齋宮跡の時期区分については、土器編年に基づき、期と段階を用いて「齋宮跡Ⅰ期第1段階」等と表記するが、本文中ではこれを簡略的に「齋宮Ⅰ-1期」と表現している。また、時代の表記は3段階区分で「前期・中期・後期」、世紀の表記は3段階区分で「前葉・中葉・後葉」とした。
- 7 遺構表示記号は、文化庁文化財部記念物課2010「発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-」に準拠し、遺構の種類から次のように表記している。
SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 SP：柱穴・ピット（SA・SBに伴う柱穴はP+番号と表記している） SZ：周溝墓
- 8 遺物実測図は基本的に実物の4分の1、石製品の一部は2分の1で掲載している。遺物写真は縮尺不同である。
- 9 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行「新版標準土色帖」（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行「日本の伝統色」第5版（1989年）を用いて補っている。
- 10 発掘調査にあたっては、齋宮跡調査研究指導委員のほか、以下の方々のご指導、ご協力を賜った。
相原嘉之、青木 敬、大澤正吾、小田裕樹、塩川哲朗、鈴木一謙（五十音順 敬称略）
- 11 図面・写真等の調査資料及び出土遺物は、齋宮歴史博物館で保管している。
- 12 発掘調査は川部浩司・小原雄也、本書の執筆・編集は小原が担当した。現地調査及び資料整理については、大川勝宏・山中由紀子・八木光代・森本周子・中西宏美の補助を得た。空中写真撮影は、明和町齋宮跡・文化観光課の協力を得て実施した。

目 次

I 前言	1
II 第200次調査	7

挿図目次

第I-1図	史跡斎宮跡位置図	4
第I-2図	令和3年度発掘調査位置図	5
第I-3図	史跡斎宮跡における大地区表示図	6
第II-1図	第200次調査 グリッド図	7
第II-2図	第200次調査 調査区位置図	8
第II-3図	第200次調査 遺構平面図1	9
第II-4図	第200次調査 遺構平面図2	10
第II-5図	第200次調査 遺構平面図3	11
第II-6図	第200次調査 土層断面図	12
第II-7図	第200次調査 弥生時代遺構平面図	14
第II-8図	S Z 11357 土器出土状況平面図・立面図	15
第II-9図	S A 6280, S B 11501 平面図・土層断面図	17
第II-10図	S B 6281・11361・11362・11500 平面図・土層断面図	19
第II-11図	S B 11342・11360 平面図・土層断面図	20
第II-12図	第200次調査 出土遺物実測図1	23
第II-13図	第200次調査 出土遺物実測図2	24
第II-14図	第200次調査 出土遺物実測図3	25
第II-15図	第200次調査 出土遺物実測図4	26
第II-16図	第200次調査 出土遺物実測図5	27
第II-17図	第200次調査 出土遺物実測図6	28

表目次

第I-1表	令和3年度史跡斎宮跡の現状変更等許可申請一覧表	3
第I-2表	令和3年度発掘調査一覧表	3
第II-1表	第200次調査 建物等一覧表	21
第II-2表	第200次調査 遺構一覧表	21
第II-3表	第200次調査 遺物観察表1	30
第II-4表	第200次調査 遺物観察表2	31
第II-5表	第200次調査 遺物観察表3	32
第II-6表	第200次調査 遺物観察表4	33
第II-7表	第200次調査 遺物観察表5	34
第II-8表	第200次調査 遺物観察表6	35

写真図版目次

巻頭図版 1	第 200 次調査 調査区遠景 / S B 11360	
巻頭図版 2	3 区 調査区全景 / 3 区 調査区全景	
写真図版 1	1 区 調査区全景 / 3 区 調査区全景 / 4 区 調査区全景 / S B 11360	36
写真図版 2	S A 6280 · S B 11501 / S B 6281 · S B 11500 / S B 11361 / S B 11362 / S Z 11354 土層 / S Z 11357 土器出土状況	37
写真図版 3	S A 6280 P 7 · 8 土層 / S A 6280 P 11 ~ 14 土層 / S A 6280 P 9 · 10 土層 / S A 6280 P 11 土層 / S A 6280 P 12 土層 / S A 6280 P 14 土層 / S B 11501 P 1 土層 / S B 11501 P 2 土層	38
写真図版 4	S B 11501 P 3 土層 / S B 11501 P 4 土層 / S B 11360 P 7 土層 / S B 11360 P 9 土層 / S B 11360 P 10 土層 / S B 11360 北廂 P 1 土層 / S B 11360 北廂 P 2 検出状況 / S B 11360 北廂 P 2 土層	39
写真図版 5	S B 11360 南廂 P 6 土層 / S B 11361 P 7 · 8 土層 / S B 11361 P 10 土層 / S B 11362 P 4 土層 / S B 6281 P 4 土層 / S B 6281 P 5 土層 / S B 11500 P 3 土層 / S B 11342 P 16 土層	40
写真図版 6	第 200 次調査 出土遺物 1	41
写真図版 7	第 200 次調査 出土遺物 2	42

I 前 言

1 調査の経緯と概要

(1) 史跡齋宮跡にかかる経緯と経過

齋宮跡の発見の契機は、高度経済成長期に齋宮段丘面の西縁部で大規模な宅地造成計画がなされ、その開発事業に先立って実施された昭和45年の齋宮跡(古里遺跡)の確認調査による。その後の発掘調査では、大型の建物を含む多くの掘立柱建物、井戸、土坑、奈良時代と鎌倉時代の大溝、踏脚礎や大型赤彩土馬、緑軸陶器等が発見され、齋宮関連の重要遺跡と認識された。昭和48年度から文化庁の補助事業として確認調査を重ね、昭和54年3月27日に国史跡に指定され、東西2km、南北700mに及ぶ137haの史跡範囲が把握されるに至った。管理団体は、明和町である。

三重県は、史跡指定に伴い齋宮跡調査事務所を設置して発掘調査にあたり、平成元年度からは新たに開館した齋宮歴史博物館によって、史跡の実態解明のための計画的な学術調査を継続的に実施している。

齋宮跡の発掘調査では、史跡東部に所在する平安時代の方格街区と齋宮中樞部の解明が進化した。平成27年度には、柳原区画で平安時代前期の齋宮寮庁を対象に、史跡整備の一環として正殿・西脇殿・東脇殿の復元建物を建設し、史跡公園「ざいこう平安の杜」を公開活用されている。

明和町は、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画に基づき、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした施設整備を計画し、平成24年度に発掘調査を行い、平成27年度から工事に着手し、平成29年3月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。平成27年4月24日には、「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」が日本遺産に認定された。

(2) 史跡齋宮跡の発掘調査の履歴

齋宮跡の発掘調査は、昭和45年の確認調査(第1次)を皮切りに、史跡内容確認の計画的な学術調

査、現状変更等に伴う調査が積み重ねられ、令和2年度には50年目の節目を迎えた。これまでは、史跡東部に位置し、平安時代の齋宮の中心地である、方格街区内部の発掘調査に重点を置き、具体的な構造の解明に取り組んできた。

これらの成果は、発掘調査概報として毎年刊行しているが、正式な発掘調査報告書「齋宮跡発掘調査報告」は、齋王の宮殿「内院」(報告Ⅰ)、柳原区画の「齋宮寮庁」(報告Ⅱ)、下園東区画の「寮庫」(報告Ⅲ)、西加座南区画の「神殿」(報告Ⅳの一部)を刊行している。今後は、これまで調査を行ってきた方格街区の他の区画とともに、飛鳥時代と奈良時代の齋宮中樞域にかかる発掘調査の正式報告書を順次刊行していく方針である。

なお、平成29～令和3年度に実施した飛鳥時代の齋宮中樞域の調査成果については、「齋宮跡発掘調査報告Ⅴ」として取りまとめ、令和4年度に刊行する予定である。

(3) 『発掘調査基本方針』の策定

齋宮歴史博物館は平成29年3月、史跡齋宮跡発掘調査の考え方や調査計画をまとめた「史跡齋宮跡発掘調査基本方針」を策定した。当該方針では、初現期(飛鳥～奈良時代)の齋宮の実態解明、方格街区内部構造の解明、衰退期(平安時代末～鎌倉時代)の齋宮の実態解明、齋宮に関わる居住、生産・流通、墓域等の解明の4項目を重点的な課題として挙げている。

基本方針の策定後、平成29～令和3年度の5年間は、史跡西部での飛鳥・奈良時代の齋宮中樞域と推定される地点の実態解明を目標として、調査を実施した。特に、史跡西部の中垣内地区では、古代伊勢道が本来の直線道路から北側にわずかに湾曲する部分を含み、さらに古代伊勢道から南側に派生する道路がみられる等、古代伊勢道が敷設される以前の重要施設が集中していたと想定されている。また、奈良時代には、南北正方位を向いた掘立柱建物の区画施設があり、奈良時代の齋宮中樞域となる重要地区と想定されている。

(4) 飛鳥時代の齋宮中枢域の実態解明

飛鳥時代の齋宮中枢域の実態解明を目的とした調査は、平成29年度から5年計画で開始し、令和3年度はその最終年度となる。

平成29～令和2年度の発掘調査(第192・193・195・197・199次調査)では、掘立柱塼に囲まれた斜方位区画や會院の詳細が判明した。斜方位区画は、建物や塼の軸が真北から東に約33度の方位を向いた施設で、掘立柱塼の北東角(第193次)及び北西角(第199次)、東辺及び東側の四脚門(第197次)が明らかとなった。

区画内部の建物配置は、北側中央に東西棟の廂付建物1棟があり、その両脇には南北棟の掘立柱建物2棟が並ぶ(第193・197・199次)。西側の建物は桁行6間・梁行2間の掘立柱建物2棟(第199次)、東側の建物は桁行6間・梁行2間で、西側柱筋に沿って目隠塼あるいは垣を伴う掘立柱建物2棟(第193・197次)である。区画内部の南西側では、3棟目の建物と想定できる掘立柱建物の柱穴が検出された(第85～8次)。

区画外部の西側から段丘崖までの空間には、総柱建物群で構成される會院がみられる(第195次)。

これらを受けて、令和3年度の第200次調査は、飛鳥時代の斜方位区画とその内部の建物(正殿、西第一堂、西第二堂)や掘立柱塼西辺、門等を対象として、規模や構造の把握を目的に実施した。調査期間は令和3年9月1日～令和4年1月31日、調査面積は296㎡である。

(5) 発掘調査現場の公開活用

齋宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な公開活用を行っている。具体的には、発掘調査現場の随時公開・見学者への説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や「子ども1日体験発掘教室」、学校団体等を対象とした体験発掘を開催している。

しかし、令和3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、体験発掘等のイベントは取り止めることとなった。発掘調査現場の公開については、令和4年1月15日に現地説明会を行い、参加者は133名であった。

この他には、日々の見学者や、明和町が主催する日本遺産活用推進協議会事業に関連したモニター

ア一等により、221名が発掘現場を訪れた。

(6) 発掘調査成果の公開講座

齋宮歴史博物館では、最新の発掘調査成果の報告と調査研究課職員による「さいくう西脇殿歴史フォーラム」でのシンポジウムを例年3月に開催している。

令和3年度については、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、開催場所を齋宮歴史博物館の講堂とし、募集人数を制限したうえで実施した。講座は、令和4年3月20日に開催し、「ここまでわかった!史跡齋宮跡」と題して、発掘調査や齋宮跡の調査研究に関する成果報告会を行った。参加人数は、41名であった。

2 調査体制

史跡齋宮跡の調査研究・整備活用に関する業務は、齋宮歴史博物館調査研究課が担当した。当該報告に関わる組織は以下の体制である。

令和3・4年度

大川勝宏(副幹事兼課長)

山中由紀子(主幹兼課長代理)

川部浩司(主査)

小原雄也(主任)

3 齋宮跡調査研究指導委員会

齋宮跡の調査・報告書作成等について指導・助言を得るため、令和3年12月24日に齋宮跡調査研究指導委員会を開催した。委員会では、第200次調査と平成29～令和2年度にかけての飛鳥時代の調査成果について総括報告等を行い、指導及び助言を得た。令和3年度における指導委員の方々は、下記のとおりである。

[指導委員]

浅野 聡 (三重大学大学院教授)

稲葉信子 (筑波大学名誉教授)

小澤 毅 (三重大学教授)

京樂真帆子 (滋賀県立大学教授)

金田章裕 (京都大学名誉教授)

黒田龍二 (神戸大学名誉教授)

仁藤智子 (国士館大学教授)

増岡 徹 (京都橋大学教授)
 本中 眞 (奈良文化財研究所所長)
 本橋裕美 (愛知県立大学准教授)
 渡辺 寛 (皇學館大学名誉教授)
 総貫友子 (神戸大学大学院教授)

(五十音順・敬称略)

許可 15 件、県許可 26 件)があった。このうち、当該許可申請の許可条件に基づく史跡齋宮跡の発掘調査及び立会いを要した案件については、その内訳を第 I - 1 表、発掘調査を実施した内容は第 I - 2 表にまとめた。

明和町主体の第 201 次調査については、「史跡齋宮跡 令和 3 年度 現状変更緊急発掘調査報告」として、令和 4 年度に明和町が刊行する予定である。

4 令和 3 年度発掘調査一覧

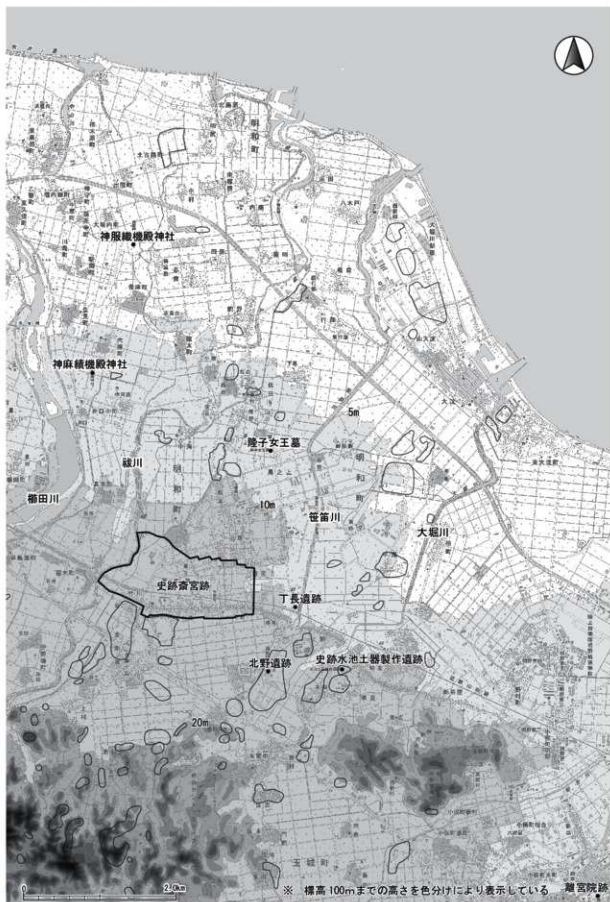
文化財保護法第 125 条第 1 項の規定による史跡現状変更等許可申請のうち、令和 3 年度は 41 件 (国

現状変更等許可申請の内容	申請及び許可件数	対応別件数
個人・民間企業による申請	33	発掘調査 8、立会 25
明和町等による地域環境整備に伴う申請	3	立会 3
明和町等による史跡環境整備及び維持管理に伴う申請	3	立会 3
三重県による計画的発掘調査のための申請	2	発掘調査 1、立会 1

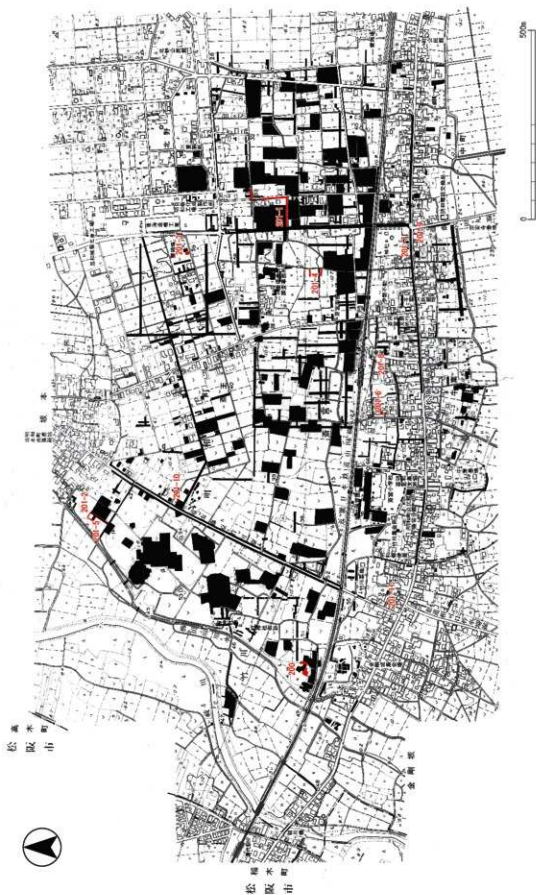
第 I - 1 表 令和 3 年度史跡齋宮跡の現状変更等許可申請一覧表

調査回数	地区	調査面積 (㎡)	調査期間	調査場所	現状変更申請者	現状変更申請理由	保存管理の土地利用区分
200	F9 ~ 10,G10	296.0	R3.9.1 ~ R4.1.31	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
201-1	S8 ~ 9	425.9	R3.4.1 ~ R3.9.24	明和町大字齋宮字西加座・東加座・東前沖	明和町	排水路改修	第一・二・三種保存地区
201-2	K4	62.0	R3.4.9	明和町大字竹川字古里	個人	宅地造成	第三種保存地区
201-3	R7	75.0	R3.5.17 ~ R3.6.1	明和町大字齋宮字楽殿	個人	宅地造成	第三種保存地区
201-4	Q10	90.0	R3.6.22 ~ R3.7.28	明和町大字齋宮字御館	明和町	発掘調査	第一種保存地区
201-5	K4	3.6	R3.8.27	明和町大字竹川字古里	個人	住宅建築	第三種保存地区
201-6	N12	43.7	R3.9.1 ~ R4.1.12	明和町大字齋宮字内山	個人	住宅建築	第三種保存地区
201-7	R12	8.4	R3.10.1	明和町大字齋宮字牛葉	個人	浄化槽設置	第四種保存地区
201-8	O12	5.8	R3.12.21	明和町大字齋宮字内山	個人	浄化槽設置	第四種保存地区
201-9	R13	5.4	R4.1.13	明和町大字齋宮字牛葉	個人	浄化槽設置	第四種保存地区
201-10	K6	17.6	R4.1.27 ~ R4.2.4	明和町大字齋宮字塚山	個人	住宅建築	第三種保存地区
201-11	H12	3.3	R4.2.21	明和町大字竹川字東裏	個人	住宅建築	第四種保存地区

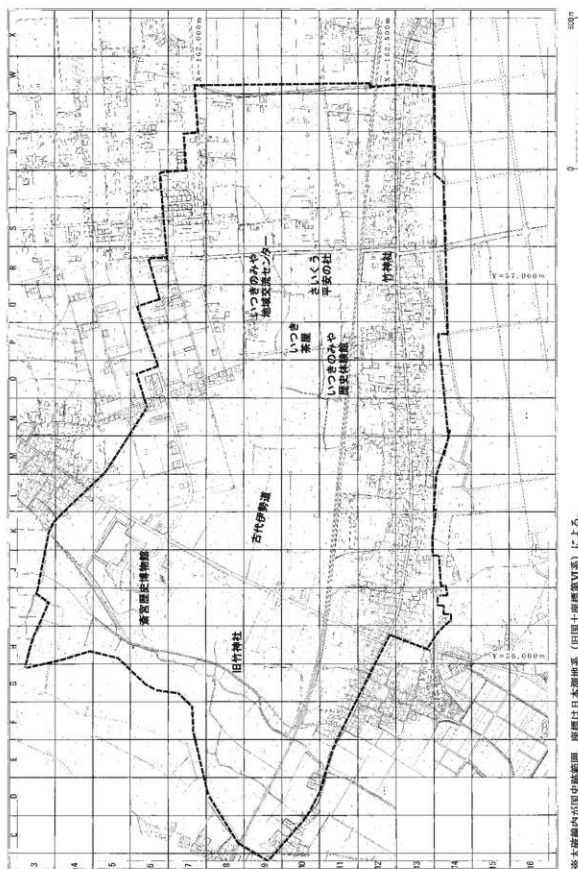
第 I - 2 表 令和 3 年度発掘調査一覧表



第1-1図 史跡齋宮跡位置図 (1: 500,000・国土地理院1/25,000「松阪」「明野」を改変)



第1-2図 令和3年度発掘調査位置図 (1:10,000)



※大破線内が国史跡範囲、座標は日本測地系（旧国土地理院VI系）による。

第 I - 3 図 史跡斎宮跡における大地区表示図（2002 年策定）

Ⅱ 第200次調査

(6AF9～10・G10 中垣内地区)

1 はじめに

半世紀にわたる発掘調査の蓄積によって、史跡西部にあたる段丘の西縁部には、古代「伊勢道」を基点として南・北派生道路沿いに飛鳥～奈良時代の掘立柱建物や堅穴建物等、広範な遺構形成が確認されている。特に掘立柱扉で構成される方形区画による空間整備が複数箇所で見られ、平安時代に方格街区が敷設される以前の飛鳥・奈良時代における齋宮の中垣城が所在すると推定されてきた。

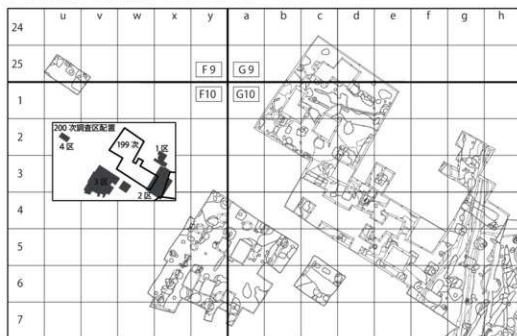
近年の調査により、飛鳥時代の齋宮は、伊勢道から南へ派生する直線道路の敷設軸や段丘崖にみる地形環境に合わせた、北で東に約33度振れる方位で、掘立柱扉による方形区画を基調とすることが判明してきた。方形区画は、第193次調査で掘立柱扉の北東角が確認され、その延伸部分の第189・197次調査で東辺と四脚門、第199次調査で掘立柱扉の北西角と北辺・西辺、第85～8次調査でその延伸部分の西辺が判明している。

方形区画は東西幅約41m、南北幅55m以上の規模をもち、区画内部は正殿・脇殿相当の掘立柱建物が整然と配置されている(本書ではこれを「斜方位区画」と呼称する)。区画内では、中央に南北二面に扉を持つ掘立柱建物1棟、

その東西には掘立柱建物2棟が南北に連なる配置が明らかとなっている。一方、斜方位区画と段丘崖の間の空間には、第195次調査で大別4期細別小5期に区分される総柱建物群の計画的な配置が確認され、斜方位区画には倉庫群、いわば「倉院」が付随する空間構成が明確となった。このように整備された空間を飛鳥時代の「齋宮中垣城」と捉えることにした。

奈良時代には、正方位の配置で方形に掘立柱扉を巡らす空間整備が隣接する2地点で設けられる。正方位区画の平面規模は、いずれも南北約57mを測るとみられ、ほぼ同一の地点で2～3回の建替えが確認されている。配置を見ると区画が東西に併存、あるいは交互に変遷を重ねていることから、飛鳥時代の斜方位区画と同様の性格が推定される。いまだ実態は不明ながら、これらの空間を奈良時代の齋宮中垣城と仮定しておく。

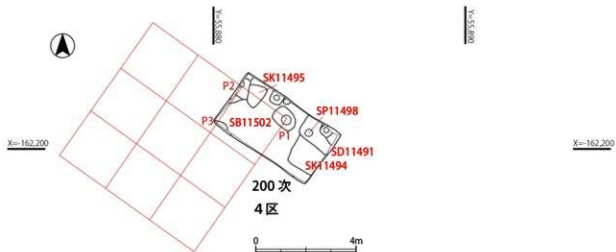
第200次調査地は、段丘面の西縁部にある旧若宮八幡神社境内地とその隣接する畑地に位置する。発掘調査は、飛鳥時代の斜方位区画の規模と構造のうち、特に掘立柱扉で構成される斜方位区画の北・西辺と門の確認、区画内部の建物構成(正殿、脇殿相当の西の殿舎等)の把握を目的としている。



第Ⅱ-1図 第200次調査 グリッド図



第Ⅱ-2図 第200次調査 調査区位置図 (1:2,000)

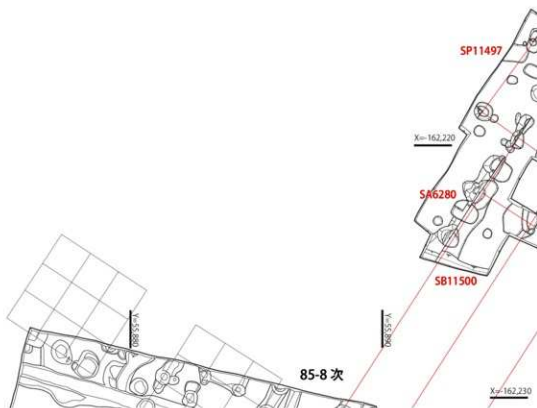


X=162,210

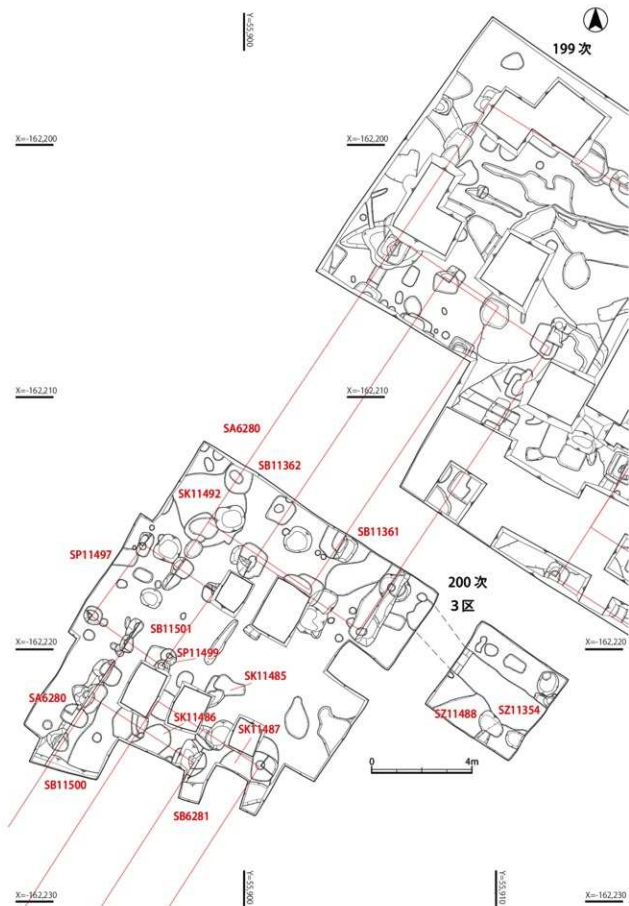
X=162,210

X=162,220

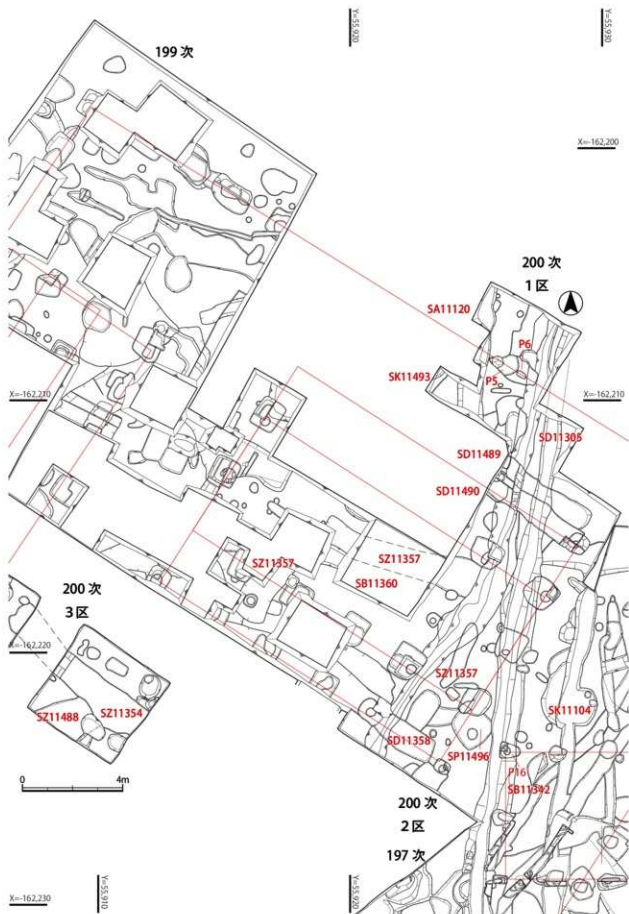
X=162,230



第Ⅱ-3図 第200次調査 遺構平面図1 (1:150)



第Ⅱ-4圖 第200次調査 遺構平面図2 (1:150)



第II-5図 第200次調査 遺構平面図3 (1:150)

2 地形環境と地層

史跡斎宮跡は、紀伊山地に端を発する柳田川(蔵川)・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高位面(明野段丘面)、段丘中位面(斎宮段丘面)の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地(海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地)を介して、伊勢湾へと連なる。史跡斎宮跡は、段丘中位面に立地し、史跡西城の段丘南西部を最高所(標高14.5m程度)として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜し、史跡の東域では標高9m程度となる。傾斜角度は1度にも達しないほどの平坦な地盤を形成している。

第200次調査は、段丘西縁部で4つの調査区(1~4区)を設定して実施した。1・2区は畑地、3・4区は林地(旧若宮八幡神社境内地)である。段丘崖下の沖積低地(現在の水田面)からは3~4mの比高差がある。現地表面の標高は14m前後で、遺構検出面(地山面)の標高は13.5m前後である。地層の把握は、第193・197次調査での観察所見を参考とし、第192・195・199次調査で得られた地層の認識を踏襲した。基本層序は上から作土(A1層)、客土(A2~A7層)、整地層(1~5層)、遺物包含層(B1・B2層)、地山からなる。地山面までの深度は、1~3区で13.5~13.6m、4区で13.4mを測る。

古代以前の遺構の大半は、遺物包含層の上面から掘り込んでいる。遺物包含層と遺構埋土の砕削物の構成や色調が似ており、発掘調査にあたっては包含層上面での遺構検出は困難であり、地山直上で行い誤認を回避するよう努めた。

3 遺構

調査の結果、弥生・古墳・飛鳥・奈良・江戸時代の各種遺構を検出した。主な遺構には、弥生時代の方形周溝墓、飛鳥時代後期の掘立柱及び門、掘立柱建物がある。以下、検出遺構については、時代毎に概観するが、遺構の全体・詳細は第Ⅱ-1~11図、第Ⅱ-1・2表に示した。

なお、当該調査の遺構番号は時代順に番号を付与した。

(1) 縄文時代の遺構と関連地層の不在

第199次調査概報での整理内容と同様に、第200次調査地やその隣接地では縄文時代に比定される遺構は、確認できていない。また、縄文時代の遺物包含層の形成は、明確

に把握できていない。出土遺物は、弥生時代以降の遺構や遺物包含層に混入して、縄文土器や石鏝、剥片がみられる。

(2) 弥生時代の遺構

調査区全域において、弥生時代前期後葉~中期前葉を中心とした土器の破片が出土している(第Ⅱ-7図)。弥生土器は、遺物包含層や遺構のほかに飛鳥時代以降の遺構や地層、後世の擾乱等から出土している。

なお、弥生時代の遺構と関連地層については、第199次調査成果の認識を踏襲している。

SK 11104 1区で検出した不整形土坑で、第193次調査区で確認した遺構の西側部分にあたる。遺構検出に留めており、詳細な構造は不明である。弥生土器のほか、有茎尖頭器が出土している(第Ⅱ-12図3)。

SK 11485 ~ 11487 3区で検出した不整形土坑で、遺構検出に留めており、詳細な規模や構造は不明である。弥生時代前~中期の弥生土器壺・甕片等が出土している。

SZ 11354 3区で検出した方形周溝墓で、第199次調査区で確認した遺構の南西側の周溝と考えられる。3区の調査区壁に沿ってサブトレンチを設定し、周溝の幅は1.1m、深さは50cm以上であることを確認した(第Ⅱ-6図)。c6グリッドにおいて、周溝埋土の上層から弥生時代中期の壺・甕(第Ⅱ-12図16・20・21)がまとめて出土した。

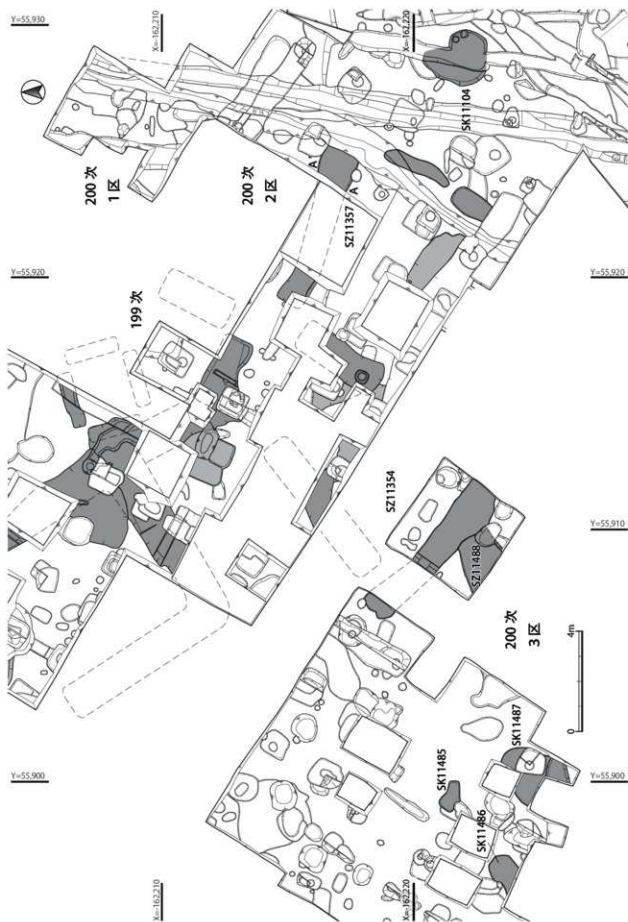
SZ 11357 2区で検出した方形周溝墓で、第199次調査区で確認した遺構の北・東側の周溝と考えられる(第Ⅱ-7・8図)。北辺の周溝内からは、弥生土器の細頸壺(第Ⅱ-12図10)が横倒して出土した。また、周溝外で北側に30cmの地点では、弥生土器の壺胴部片(第Ⅱ-15図126)が出土している。これらは別遺構に伴うものと想定できるが、立木の樹根による影響で遺構の特定に至らなかった。

SZ 11488 3区で検出した方形周溝墓で、SZ 11354の周溝と一部重複している。遺構検出の状況から、SZ 11488が先行すると考えられる。擾乱除去後に土層断面の観察を行い、深さ30cm以上であることを確認した。

(3) 古墳時代の遺構

古墳時代のものとして想定される土坑が1基あり、その他の遺構は確認できない。3区では、包含層や整地層の掘削時には、当該時期に属する土器の高杯等が出土している。

SK 11492 3区で検出した土坑で、平面の形状は方形に近いが、遺構検出に留めており、詳細は不明である。規模



第Ⅱ-7圖 第200次調査 弥生時代遺構平面圖 (1:150)

は東西が26 m、南北が27 mであり、堅穴建物である可能性も含んでいる。古墳時代後期のものとみられる土師器の破片が出土している。

(4) 飛鳥時代の遺構

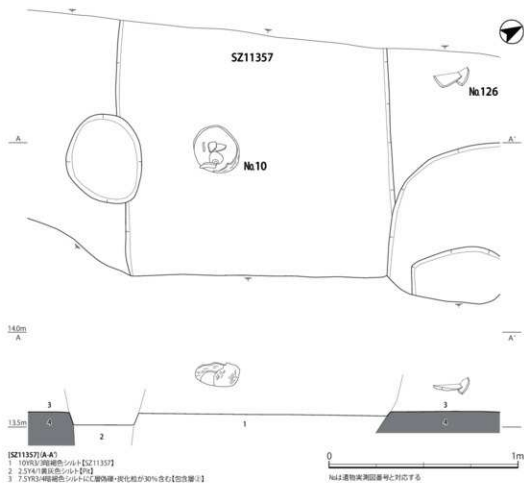
調査区全域で多数の柱穴（柱掘方と柱抜取穴）が設けられており、諸特徴による組み合わせから掘立柱塼2条、門1棟、掘立柱建物6棟を確認した。第199次調査の状況と同様に、柱掘方と柱抜取穴等から飛鳥時代後期（降っても奈良時代初め）の土器片の出土をみるが、相対的に出土点数は僅少である。遺構検出面とした地山面までの地層除去の際に出土した土器が大半であることから、本来はこうした柱穴に包含されていた可能性が高い。これらの遺構は、柱穴の配置と重複関係等の特徴、出土遺物や周辺の既往調査の成果に基づく塼・建物軸の方位から飛鳥時代後期～奈良時代初め頃に属するものと判断する。

SA 11120・11300（掘立柱塼北辺） 斜方位区画の掘立柱塼北辺である。第193次調査及び第199次調査で検出

された掘立柱塼の延長に相当する。塼北辺は1回の建替えがあり、当初の塼をSA 11300、建替え後のものをSA 11120と表記しているが、本調査では差別がし難いため、便宜上SA 11120で統一する。

当該調査は、1区で北辺中央付近にあたる塼柱穴P5・6の平面検出を行った。塼の柱掘方の重複関係からP6がP5より先行した時期のものであり、ほぼ同位置で1回の建替えを確認できた。いずれの塼柱穴にも、埋土が明黄褐色シルトの柱抜取穴が認められる。掘立柱建物北辺の中央には、門の控え柱等の構造は確認できなかった。

SA 6280（掘立柱塼西辺） 斜方位区画の掘立柱塼西辺である（第Ⅱ-9図）。第85～8次調査及び第199次調査で検出された掘立柱塼の延長に相当する。第200次調査では、P5～14の柱穴を検出した。塼柱穴には、平面検出及び半載掘削による埋土の観察から、明黄褐色シルトの柱抜取穴が認められ、1回の建替えが確認できる。新段階（建替え後）の柱穴はP5・7・10・11・13、古段階（建替え前）の柱穴はP8・9・12・14である。



第Ⅱ-8図 SZ 11357 土器出土状況平面図・立面図（1：20）

新段階の掘立柱脚は、堀柱掘方がいずれも壺掘りであり、SB 11501（西門）とSB 11361（西第一堂（新））、SB 6281（西第二堂（新））と並存するものである。堀柱穴P5・6・11・13の位置は、SB 11361（西第一堂（新））とSB 6281（西第二堂（新））の梁行方向の柱列と揃う。そのため、P5・6は古段階の堀柱穴とはほぼ同位置での建替えとなるが、P11・13は古段階の柱穴P12・14から北東方向に13m程ずらした位置での建替えとなる。また、P7・10はSB 11501（西門）を構成する柱穴で、西門と堀を繋ぐ柱間が短く、P6・7間は2.1m、P10・11間は1.6mとなる。

古段階の堀柱穴P8・9・12・14は、SB 11362（西第一堂（古））とSB 11500（西第二堂（古））と並存するものである。堀柱穴P8・9は控え柱に相当する柱穴が確認できないため、四脚門は伴わないものと想定する。堀柱穴P12・14は、平面検出及び半載掘削による埋土の観察から、SB 11500（西第二堂（古））の西側柱列と共有することが確認できる。一方で、SB 11362（西第一堂（古））の西側柱列と共有する堀柱穴は、新段階の堀柱穴P5・6と同位置で重複すると想定できるものの、平面検出による確認はできなかった。

P12・14の柱掘方は、布掘り構造（柱穴2つを繋ぐいわゆる溝持ち構造か）あるいは柱筋溝状遺構となる。掘方は、幅が約70～90cm、深さが約30cmで、地業後に壺掘りにより柱を設置したものとする。また、P12・14の溝状掘方がP11まで延伸して重複することや、P9・12の柱間が3.3mと比較的長い間隔となることから、新段階の堀柱穴P11と同位置には古段階の堀柱穴の存在が想定される。ただし、平面検出及び土層断面の観察からは、古段階の堀柱穴を判断できなかった。

飛鳥時代後期に属するとみられる遺物には、P11柱掘方埋土や柱抜取埋土で土師器の杯片（第Ⅱ-13図30～32）等がある。

SB 11501（西門） 斜方位区画の掘立柱脚西辺SA 6280に取り付く門である（第Ⅱ-9図）。第197次調査で検出された東門SB 11320・SB 11330と対になるもので、控え柱が4本あることから四脚門となる。平面検出及び半載掘削による埋土の観察から、いずれの柱掘方にも柱痕跡が認められる。

SB 11501（西門）は、建替え後の掘立柱脚SA 6280に伴う構造で、西門の建替えは確認できない。SP 11497・SP 11499は、P1・3に先行する柱穴であるが、門の構造に伴うものとは判断し難い。

SB 11360（正殿） 斜方位区画の北側中央に位置し、第199次調査で検出された建物で、正殿に相当すると考えられる（第Ⅱ-11図）。第200次調査では、建物東側の柱穴を検出した。構造は桁行5間・梁行4間の東西棟の掘立柱建物で、南北両面に廂を伴う。建物柱穴には、埋土が明黄褐色シルトの柱抜取穴が認められるものの、建物の建替えは確認できない。

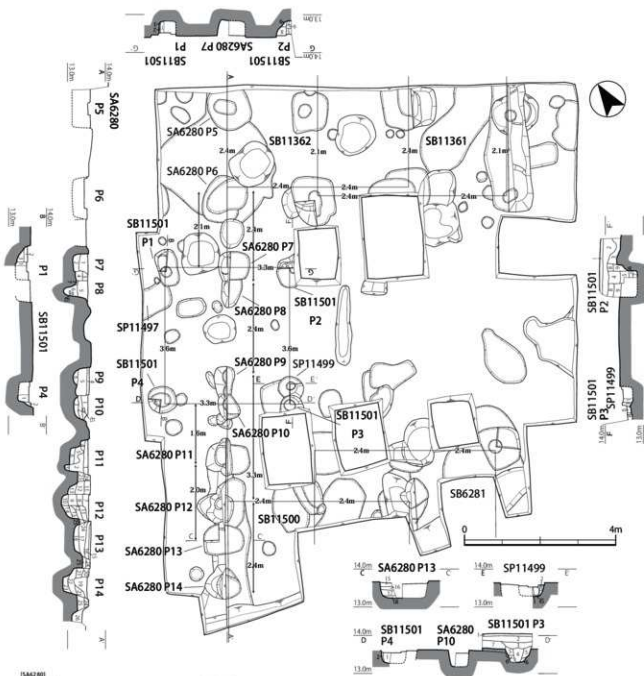
南北廂は、柱列に沿って溝SD 11358・SD 11490がみられ、布掘り構造（柱穴2つを繋ぐいわゆる溝持ち構造か）あるいは柱筋溝状遺構となる。北廂P1は、平面検出及び半載掘削による埋土の観察から、SD 11490による地業後に、壺掘りにより柱が設置されている。北廂P2と南廂P6については、想定される柱筋よりも建物の外側の位置で確認されている。柱穴P8の周囲やP6からP10の間には、床束柱と想定される小穴P11～14が確認できる。床束柱に相当する小穴は、身舎や廂の柱穴に対して小規模で、浅いことから包含層掘削の段階から確認することに努めたが、上記の柱穴以外は検出し得なかった。

飛鳥時代後期に属するとみられる遺物には、北廂P1の柱痕跡埋土で土師器の杯片、北廂P2の柱抜取埋土及び掘方埋土で土師器の杯片、身舎P7の柱抜取埋土で土師器の杯片（第Ⅱ-13図35・38～42・46）がある。

SB 11360南側で調査区（3区c6グリッド）を設定し、正殿前面における建物等の確認を行ったが、この範囲は空閑地であることが明らかになり、儀式空間等としての利用が推定できる。当該範囲の包含層からは、飛鳥時代後期に属する土師器の杯（第Ⅱ-16図154）が出土している。

SB 11361（西第一堂（新）） 斜方位区画の西側に位置し、第199次調査で検出された建物で、SB 11362（西第一堂（古））の建替え後の殿舎に相当する（第Ⅱ-10図）。SB 11361は、SB 11362（西第一堂（古））から南東へ約2.7mずらした位置で建替えが行われている。当該調査では、建物の南側を検出した。構造は桁行6間・梁行2間の南北棟の掘立柱建物である。建物東側柱P7・8の柱掘方は布掘りとなり、柱痕跡が認められる。布掘り柱掘方の掘削後、建物の柱を据えて埋戻す方法は、SA 6280（掘立柱脚西辺）やSB 11360（正殿）でみられる布掘りの構造とは異なる。その他の柱掘方P9～11は壺掘りとなり、埋土が明黄褐色シルトの柱抜取穴が認められる。

SB 11362（西第一堂（古）） 斜方位区画の西側に位置し、第199次調査で検出された建物で、SB 11361（西第



SA6280
P7-P8 (A-A')

1. 23Y41 黄灰色シルト
2. 23Y72 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 20%) P7 阻層部①
2. 23Y41 黄灰色シルト
3. 23Y51 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 3%) P7 阻層部②
4. 23Y51 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 3%) P7
5. 23Y72 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 3%) P7 阻層部③
6. 23Y71 黄褐色シルト (土中の腐植質) P8 阻層部①
7. 23Y52 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 5%) P8
- P9-P10 (A-A')**
1. 23Y72 黄褐色シルト (土中の腐植質) P10 阻層部①
2. 23Y62 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 3%) P10 阻層部②
3. 23Y31 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 3%) P10
3. 23Y62 黄褐色シルト P9 阻層部①
4. 23Y51 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 10%) P9 阻層部②
6. 23Y61 黄褐色シルト P9 阻層部③

P11 (A-A')

1. 23Y72 黄褐色シルト (阻層部①)
2. 23Y72 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 3%) 阻層部②
3. 23Y51 黄褐色シルト
4. 23Y61 黄褐色シルト (土中の腐植質 3%)
5. 23Y31 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 10%)
6. 23Y31 黄褐色シルト
- P12 (A-A')**
7. 23Y72 黄褐色シルト (阻層部①)
8. 23Y71 黄褐色シルト (阻層部②)
9. 23Y51 黄褐色シルト
10. 23Y71 黄褐色シルト (阻層部③)
11. 23Y61 黄褐色シルト
12. 23Y62 黄褐色シルト (土中の腐植質 3%)
13. 23Y62 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 3%)
14. 23Y51 黄褐色シルト (酸化剤 10% C 層厚約 3%)
- P13 (A-A') (C)**
15. 23Y61 黄褐色シルト
16. 23Y61 黄褐色シルト (土中の腐植質 3%)
17. 23Y31 黄褐色シルト (酸化剤 2% C 層厚約 10%)
18. 23Y31 黄褐色シルト

P14 (A-A')

19. 23Y72 黄褐色シルト (阻層部①)
20. 23Y51 黄褐色シルト
21. 23Y51 黄褐色シルト (土中の腐植質 1%)
22. 23Y41 黄灰色シルト
23. 23Y41 黄灰色シルト
24. 23Y71 黄褐色シルト (酸化剤 3% C 層厚約 3%)
25. 23Y61 黄褐色シルト (新築土①)
26. 23Y62 黄褐色シルト (阻層①)
- SB11501**
- P1 (B-B') (D)**
1. 23Y41 黄灰色シルト (酸化剤 20% C 層厚約 3%) (阻層部①)
2. 23Y11 黄褐色シルト
3. 23Y52 黄褐色シルト
- P2 (F-F') (D)**
1. 汚土
2. 腐植質
3. 腐植質
4. 23Y41 黄灰色シルト
5. 23Y41 黄灰色シルト
6. 23Y52 黄褐色シルト
7. 23Y52 黄褐色シルト
8. 23Y41 黄灰色シルト (阻層部①)
9. 23Y41 黄灰色シルト
10. 23Y41 黄灰色シルト
11. 23Y41 黄灰色シルト
12. 23Y41 黄灰色シルト
13. 23Y41 黄灰色シルト
14. 23Y41 黄灰色シルト (阻層部①)
15. 23Y41 黄灰色シルト
16. 23Y41 黄灰色シルト
17. 23Y41 黄灰色シルト
18. 23Y41 黄灰色シルト
19. 23Y41 黄灰色シルト
20. 23Y41 黄灰色シルト
21. 23Y41 黄灰色シルト
22. 23Y41 黄灰色シルト
23. 23Y41 黄灰色シルト
24. 23Y41 黄灰色シルト
25. 23Y41 黄灰色シルト
26. 23Y41 黄灰色シルト
27. 23Y41 黄灰色シルト
28. 23Y41 黄灰色シルト
29. 23Y41 黄灰色シルト
30. 23Y41 黄灰色シルト
31. 23Y41 黄灰色シルト
32. 23Y41 黄灰色シルト
33. 23Y41 黄灰色シルト
34. 23Y41 黄灰色シルト
35. 23Y41 黄灰色シルト
36. 23Y41 黄灰色シルト
37. 23Y41 黄灰色シルト
38. 23Y41 黄灰色シルト
39. 23Y41 黄灰色シルト
40. 23Y41 黄灰色シルト
41. 23Y41 黄灰色シルト
42. 23Y41 黄灰色シルト
43. 23Y41 黄灰色シルト
44. 23Y41 黄灰色シルト
45. 23Y41 黄灰色シルト
46. 23Y41 黄灰色シルト
47. 23Y41 黄灰色シルト
48. 23Y41 黄灰色シルト
49. 23Y41 黄灰色シルト
50. 23Y41 黄灰色シルト
51. 23Y41 黄灰色シルト
52. 23Y41 黄灰色シルト
53. 23Y41 黄灰色シルト
54. 23Y41 黄灰色シルト
55. 23Y41 黄灰色シルト
56. 23Y41 黄灰色シルト
57. 23Y41 黄灰色シルト
58. 23Y41 黄灰色シルト
59. 23Y41 黄灰色シルト
60. 23Y41 黄灰色シルト
61. 23Y41 黄灰色シルト
62. 23Y41 黄灰色シルト
63. 23Y41 黄灰色シルト
64. 23Y41 黄灰色シルト
65. 23Y41 黄灰色シルト
66. 23Y41 黄灰色シルト
67. 23Y41 黄灰色シルト
68. 23Y41 黄灰色シルト
69. 23Y41 黄灰色シルト
70. 23Y41 黄灰色シルト
71. 23Y41 黄灰色シルト
72. 23Y41 黄灰色シルト
73. 23Y41 黄灰色シルト
74. 23Y41 黄灰色シルト
75. 23Y41 黄灰色シルト
76. 23Y41 黄灰色シルト
77. 23Y41 黄灰色シルト
78. 23Y41 黄灰色シルト
79. 23Y41 黄灰色シルト
80. 23Y41 黄灰色シルト
81. 23Y41 黄灰色シルト
82. 23Y41 黄灰色シルト
83. 23Y41 黄灰色シルト
84. 23Y41 黄灰色シルト
85. 23Y41 黄灰色シルト
86. 23Y41 黄灰色シルト
87. 23Y41 黄灰色シルト
88. 23Y41 黄灰色シルト
89. 23Y41 黄灰色シルト
90. 23Y41 黄灰色シルト
91. 23Y41 黄灰色シルト
92. 23Y41 黄灰色シルト
93. 23Y41 黄灰色シルト
94. 23Y41 黄灰色シルト
95. 23Y41 黄灰色シルト
96. 23Y41 黄灰色シルト
97. 23Y41 黄灰色シルト
98. 23Y41 黄灰色シルト
99. 23Y41 黄灰色シルト
100. 23Y41 黄灰色シルト

第Ⅱ-9図 SA 6280、SB 11501 平面図・土層断面図 (1:100)

一堂(新)の建替え前の殿舎に相当する(第Ⅱ-10図)。当該調査では、建物の南側を検出した。構造は桁行6間・梁行2間の南北棟の掘立柱建物で、建物西側の欄柱とS A 6280(掘立柱西辺)のP 5・6が共有する構造となる。S B 11362のP 4は、平面検出及び半載掘削による埋土の観察から、埋土が明黄褐色シルトの柱状取穴が認められる。柱状取穴は、柱掘方の底面付近まで及んでおり、柱痕跡は確認できない。S B 11362のP 5や南妻中央の柱穴は、S B 11361(西第一堂(新))の柱穴が同位置で建替えられており、詳細な状況は不明であった。

S B 6281(西第二堂(新)) 斜方位区画の西側に位置し、第85-8次調査で検出された建物で、S B 11500(西第二堂(古))の建替え後の殿舎に相当する(第Ⅱ-10図)。S B 6281は、S B 11500(西第二堂(古))から北へ約1.2m、東へ約2.4mずらした位置に建替えが行われ、S A 6280(掘立柱西辺)のP 11と北妻柱が直線上に揃う。構造は桁行6間・梁行2間の南北棟の掘立柱建物である。P 4は、掘方底部付近で柱痕跡が確認できた。P 5は、平面検出及び半載掘削による埋土の観察を行ったが、攪乱の影響により柱痕跡や柱状取穴の状況は不明である。P 6は、立木の影響により平面検出に留まり、詳細な状況は不明である。

飛鳥時代後期に属するとみられる遺物には、P 6柱状取穴で土師器の杯(第Ⅱ-13図62)等がある。

S B 11500(西第二堂(古)) 斜方位区画の西側に位置する建物で、S B 6281(西第二堂(新))の建替え前の殿舎に相当する(第Ⅱ-10図)。建物南側は未確認であるが、東第二堂(古)との対応関係等から、構造は桁行6間・梁行2間の南北棟の掘立柱建物になると推定され、建物西側の欄柱とS A 6280(掘立柱西辺)のP 12・14が共有する構造となる。P 3は、平面検出及び攪乱除去後の埋土観察から、明黄褐色シルトの柱状取穴が認められる。P 4は、平面検出により、明黄褐色シルトの柱状取穴が確認できた。**S B 11502** 4区で検出した総柱の掘立柱建物である。P 1~3の柱穴を検出し、柱掘方の平面形は方形で、柱痕跡が確認できる。第195次調査区で確認された総柱建物群(倉院)の北側に位置していることや、S B 11502の柱配列から、建物の構造は総柱建物になると想定できる。

飛鳥時代後期に属するとみられる遺物には、土師器の杯片(第Ⅱ-13図70)がある。

S D 11358 第199次調査で検出した遺構の南東側の延長にあたり、第200次調査の状況を踏まえて、遺構表示記号

をS ZからS Dに変更した。S B 11360南側の布掘り柱掘方と想定される溝で、建物の柱筋と並行する(第Ⅱ-11図)。溝の幅は、S B 11360の南廂P 1~5の柱掘方と同程度とみられる。e 5グリッドで北側に影れる形状となるが、この範囲については弥生時代の方形周溝墓と重複しており、平面検出時に誤認している可能性がある。

S D 11489・S D 11490 S B 11360北廂の布掘り柱掘方と想定される溝で、建物の柱筋と並行する(第Ⅱ-11図)。遺構検出の状況から、S D 11489がS D 11490より先行した時期のものと判断する。S D 11490は、平面検出と半載掘削の状況を確認しており、S B 11360北廂P 1の柱掘方の底面より10cm程深くなる。S D 11489は、S D 11490と並行する同規模の溝であるが、S B 11360との関連性は課題として残る。

S D 11491・S P 11498 4区で検出した遺構で、S D 11491は掘立柱建物の布掘り状掘方、S P 11498は南西隅の柱穴の可能性が。出土遺物は、弥生土器の壺片のみであるが、第195次調査成果を踏まえると、飛鳥時代後期の総柱建物群(倉院)の一部と想定できる。

S K 11493 1区で検出した土坑とみられる遺構で、東側の一部が確認できたのみで、詳細な規模や形状は不明である。遺構検出時には、須恵器陶製の破片(第Ⅱ-13図76)が出土している。

S K 11494 4区で検出した土坑で、遺構の重複関係からS D 11491より先行する時期のものと判断する。遺構検出に留めており、詳細は不明である。出土遺物には、須恵器の壳体部片(第Ⅱ-13図75)がある。

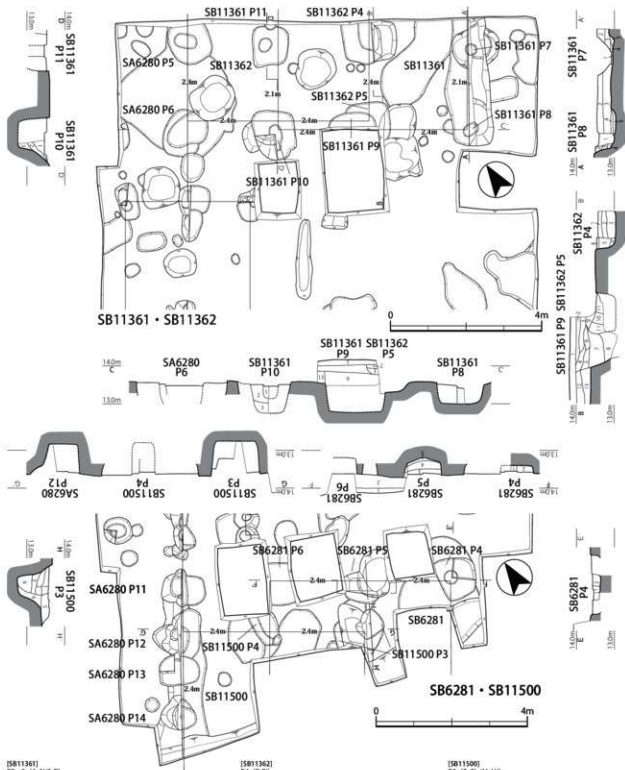
S K 11495 4区で検出した土坑で、遺構の重複関係からS B 11502 P 2より新しい時期のものと判断する。遺構検出に留めており、詳細は不明である。

S P 11496 2区で検出した柱穴で、遺構の重複関係からS B 11360 P 7より先行する時期のものと判断する。柱掘方埋土が黒褐色シルト、柱状取埋土は明黄褐色シルトとなり、飛鳥時代後期の斜方位区画内の掘立柱建物の特徴と共通する。他の柱穴との関係性は不明である。

(5) 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構は、掘立柱建物1棟である。第197次調査で検出された建物に相当し、奈良時代の斎宮中核域と推定される方形区画と方位が揃う。

S B 11342 桁行7間・梁行2間の東西棟の建物で、建物軸



SB11361

- P7 (B-F/C-C)** 【柱取穴】
 1 2.5V3/1 黒褐色シルト
 2 2.5V4/1 黄灰色シルト
 3 2.5V3/1 黒褐色シルト (10cm程度の10%含む)
 4 2.5V3/1 黒褐色シルト (炭化粒 1% C層含層 3%)
 5 2.5V4/1 黄灰色シルト (炭化粒 3% C層含層 10%)
PH (C-C-B)

- 1 2.5V7/2 灰黄色シルト
 2 2.5V4/1 黄灰色シルト (炭化粒 3% C層含層 20%)
 3 2.5V4/1 黄灰色シルト (炭化粒 1% C層含層 3%)

SB11361・SB11362

- SB11361 P5 (B-F/C-C)**
 1 粘土
 2~8 灰層
 9 2.5V7/3 灰黄色シルト (10cm程度の10%含む) 【SB11361 P9】
 10 2.5V3/3 紅い黄褐色シルト 【SB11362 P5 柱取穴】
 11 2.5V3/1 黒褐色シルト (炭化粒 3% C層含層 5%)
 12 100WS/2 灰褐色シルト 【柱取穴】
 13 2.5V3/1 黒褐色シルト 【柱取穴】

SB11362

- P4 (B-F)**
 1 2.5V5/2 灰黄色シルト 【柱取穴】
 2 2.5V5/2 灰黄色シルト
 3 2.5V5/2 灰黄色シルト (炭化粒 3% C層含層 5%)
 4 2.5V5/2 灰黄色シルト (炭化粒 3% C層含層 20%) 【柱取穴】
 5 2.5V3/1 黒褐色シルト (炭化粒 3% C層含層 5%)
 6 2.5V5/2 灰黄色シルト (炭化粒 1% C層含層 3%)

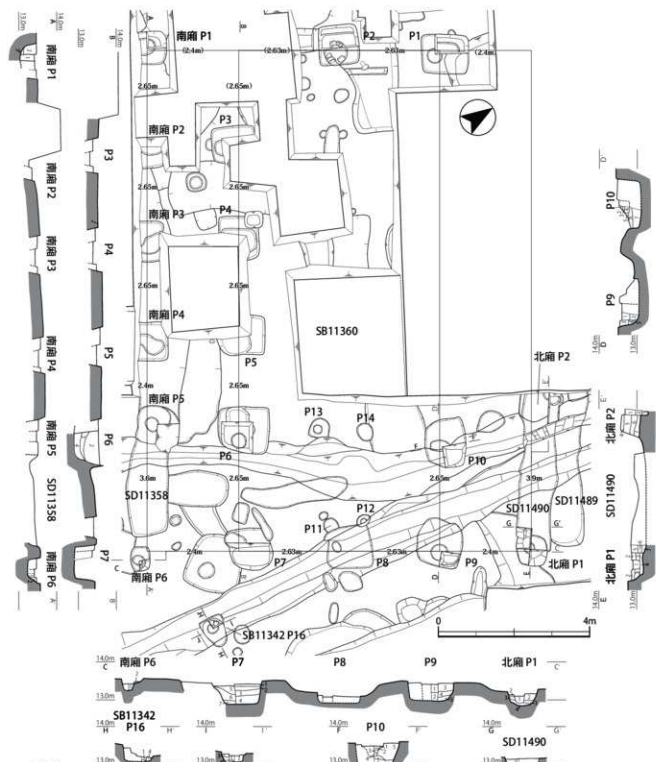
SB6281

- P4 (B-F/F-F)**
 1 2.5V5/1 黄灰色シルト (10cm程度の5%含む) 【柱取穴】
 2 2.5V4/1 黄灰色シルト (10cm程度の5%含む) 【柱取穴】
P5 (F-F)
 1 粘土
 2 100WS/2 灰黄色シルト 【柱取穴】
 3 2.5V3/1 黒褐色シルト
 4 2.5V3/1 黒褐色シルト (炭化粒 3% C層含層 20%)
 5 2.5V3/1 黄灰色シルト

SB11500

- P2 (B-F/F-F)**
 1 2.5V7/2 灰黄色シルト 【柱取穴】
 2 2.5V7/2 灰黄色シルト (炭化粒 3% C層含層 10%) 【柱取穴】
 3 2.5V7/2 灰黄色シルト 【柱取穴】
 4 2.5V7/2 灰黄色シルト (5cm程度の5%含む) 【柱取穴】
 5 2.5V2/2 灰黄色シルト (5cm程度の10%含む)
 6 2.5V3/1 黒褐色シルト

第II-10図 SB 6281・11361・11362・11500 平面図・土層断面図 (1:100)



[SB11340]

南廂 P1 (A-B)

1. 10YR5/2 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 3%) 【柱敷板】
2. 10YR5/3 黄褐色粘板層シルト (粒径 3% C 層係数 3%)
3. 10YR5/4 黄褐色粘中層シルト (粒径 3% C 層係数 3%)

南廂 P2 (A-B/C)

1. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
2. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
3. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)

北廂 P1・SD11490 (C/F/E/G/H)

1. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
2. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
3. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
4. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
5. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
6. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
7. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)

南廂 P2 (A-E)

1. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
2. 23Y2/2 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
3. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)

4. 23Y2/1 黄褐色シルト (5mm 程の塊 1% 含む)
5. 23Y5/1 黄褐色シルト (粒径 1% C 層係数 2%)
6. 23Y4/1 黄褐色シルト
7. 23Y2/1 黄褐色シルト

P6 (B-D)

1. 10YR5/3 黄褐色粘中層シルト (粒径 3% C 層係数 3%) 【柱敷板】
2. 10YR5/4 黄褐色粘板層シルト (粒径 13% C 層係数 30%)
3. 10YR5/2 黄褐色粘中層シルト (粒径 3% C 層係数 3%)
4. 10YR5/2 黄褐色粘中層シルト (粒径 13% C 層係数 30%)

P7 (B-D/E/F)

1. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
2. 23Y4/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
3. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)

P9 (C-D/D)

1. 10YR5/2 黄褐色粘中層シルト (粒径 3% C 層係数 20%)

2. 10YR6/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 3%)
3. 10YR6/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 3%)
4. 10YR5/1 黄褐色シルト
5. 23Y2/1 黄褐色シルト

P10 (D-E/F)

1. 23Y2/2 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
2. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
3. 23Y2/2 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
4. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 10%)
5. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 20%)
6. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 20%)
7. 23Y2/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 3%)

P16 (B-C/E/F)

1. 23Y4/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 1%) 【柱敷板】
2. 23Y2/1 黄褐色シルト (5mm 程の塊を含む)
3. 23Y5/1 黄褐色シルト (粒径 3% C 層係数 5%)
4. 23Y2/1 黄褐色シルト (10mm 程の塊を含む)

第二 - 11 図 SB 11342・11360 平面図・土層断面図 (1 : 100)

遺構名	基部構造	建物形式	平面形式	桁行間数 柱間	桁行総長	梁行間数 柱間	梁行 総長	備考	遺構の性格
SA11120 SA11300	掘立	一本柱廊	-	23m	38.2m 40.8m	-	-	北辺建替 (新・古)	遮蔽
SA6280	掘立	一本柱廊	-	(新)1.6~2.1m (古)2.4~3.3m	54.2m 以上	-	-	西辺建替 (新・古)	遮蔽
SB11501	掘立	四脚門	-	1間 3.6m	3.6m	2間 1.65m	3.3m		西門
SB11360	掘立	側柱	二面廂	5間 2.65m	13.25m	4間 2.4~2.63m	5.3m (10.2m)		正殿
SB11361	掘立	側柱	無廂	6間 2.1m	13.6m	2間 2.4m	4.9m	建替後新 布張り柱掘方	西第一堂(新)
SB11362	掘立	側柱	無廂	6間 2.1m	13.6m	2間 2.4m	4.8m		西第一堂(古)
SB6281	掘立	側柱	無廂	6間 2.26~2.4m	13.6m	2間 2.4m	4.8m	建替後新	西第二堂(新)
SB11500	掘立	側柱	無廂	6間 2.16~2.4m	13.0m	2間 2.4m	4.8m	建替後古	西第二堂(古)
SB11502	掘立	総柱	-	2間以上 2.2m	-	2間以上 2.2m	-		倉庫

第Ⅱ-1表 第200次調査 建物等一覧表

遺構名	調査時 地区・遺構名		グリッド	時期	出土遺物
SK11104	2区	土坑 2	g6, h6	弥生時代	弥生土器、石製品
SK11485	3区	柱穴 17	y6	弥生時代	弥生土器、石製品
SK11486	3区	土坑 7	y6	弥生時代	弥生土器
SK11487	3区	土坑 4・8	a6, y7	弥生時代	弥生土器
SZ11354	3区	土坑 1, 溝 5	b5, c6	弥生時代	弥生土器
SZ11357	2区	土坑 7, 溝 4・7	f5・6, g5・6	弥生時代	弥生土器
SZ11488	3区	溝 6	c6	弥生時代	弥生土器
SA6280	3区	柱穴 10~14・19・ 22・24, 溝 2	x5~7, y4・5	飛鳥時代	弥生土器、土師器
SA11120 SA11300	1区	土坑 3・6	g3	飛鳥時代	弥生土器、土師器
SB6281	3区	柱穴 16・18・20	y6, a7	飛鳥時代	弥生土器、土師器、須恵器、石製品
SB11342	2区	g6Pit1	g6	奈良時代	弥生土器、土師器
SB11360	1・2区	柱穴 1~8	f6・7, g4~6, h4・5	飛鳥時代	弥生土器、土師器、石製品
SB11361	3区	柱穴 1・5・6・8・9, 溝 1	a4・5, b5	飛鳥時代	弥生土器、土師器
SB11362	3区	柱穴 7	a4・a5・b4・b5	飛鳥時代	土師器、石製品
SB11500	3区	柱穴 21・23, 溝 4	y6・7	飛鳥時代	弥生土器、土師器
SB11501	3区	柱穴 2・4・15, y6Pit2	x4・5, y5・6	飛鳥時代	弥生土器、土師器
SB11502	4区	u25Pit3	u25	飛鳥時代	土師器
SD11305	1・2区	溝 1	g2~7	江戸時代	弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器、近世陶器
SD11358	2区	溝 8	f6	飛鳥時代	弥生土器
SD11489	1区	溝 3	g4・h4	飛鳥時代	弥生土器
SD11490	1区	溝 6	g4・h4	飛鳥時代	弥生土器
SD11491	4区	溝 1	u25・v25	飛鳥時代	土師器
SK11492	3区	土坑 2	y4	古墳時代	弥生土器、土師器
SK11493	1区	土坑 10	f3	飛鳥時代	弥生土器、土師器、陶硯
SK11494	4区	土坑 1	u25, u1	飛鳥時代	弥生土器、須恵器
SK11495	4区	土坑 2	u25	飛鳥時代	弥生土器
SP11496	2区	g6Pit2	g6	飛鳥時代	弥生土器
SP11497	3区	柱穴 3	x5	飛鳥時代	弥生土器
SP11498	4区	u25Pit2	u25	飛鳥時代	弥生土器
SP11499	3区	y6Pit1	y6	飛鳥時代	弥生土器

第Ⅱ-2表 第200次調査 遺構一覧表

は正方位である(第Ⅱ-11図)。北西角の柱穴P16を検出し、半截掘削により柱痕跡を確認した。柱掘方の形状は不整形で、掘方底面で5cm程の円環3点が検出されている。

(6) 江戸時代の遺構

江戸時代の遺構は、溝1条である。1・2区の作土・客土掘削時には、18世紀頃の土器や陶磁器が比較的多く出土しており、周辺に遺構の広がりが見えてくる。一方で、3・4区については、当該時期の遺物は僅少である。

SD 11305 1・2区から第193・197次調査にかけて、南北に縦断する溝で、規模は延長47m以上、幅1m、深さ40cm程である。18世紀頃の土器等の焙烙のほか、弥生時代～鎌倉時代の土器等が出土している。

4 遺物

遺物整理用コンテナ43箱分の遺物が出土し、縄文土器、弥生土器、土器、須恵器、陶硯(円面硯)、中世陶器、近世陶磁器、土製品(石錘)、石製品(有茎尖頭器、石鏃、磨石、磨石、磨石、石錘、砥石)、鍛冶滓等があった(第Ⅱ-12～17図)。詳細は遺物観察表(第Ⅱ-3～8表)に拠ることとし、ここでは特徴的な遺物のみを記述する。

(1) 弥生時代の遺構(第Ⅱ-12図)

SK 11104 出土遺物(1～3) 1は、弥生土器の壺胴部片で、外面にヘラミガキが施される。2は、弥生土器の壺の口縁部片で、口縁部内面にはユビオサエによる凹みが見られる。3は、石器の有茎尖頭器で、先端の一部は欠損するが、ほぼ完存のもので、縄文時代早期に属する。

SK 11485 出土遺物(4) 石器の剥片で、ササカイト製のものである。この他、弥生土器の小片がみられる。

SK 11486 出土遺物(5) 弥生土器の壺頸部片で、外面には貝殻描直線文を施す。弥生時代中期前葉に属する。

SK 11487 出土遺物(6・7) 6は弥生土器の壺口縁部片で口縁部に刻目を施す。7は弥生土器の壺底部片である。これらは、弥生時代前～中期に属する。

SZ 11357 出土遺物(8～10) 8～10は、弥生土器の壺で、8は頸部片、9は胴部片である。10は口縁部と胴部の一部を欠くが、ほぼ完存のもの。口縁部の外面には2条の凹線文があり、頸部から胴部上半にかけて縦方向のハケ、胴部下半は横方向のヘラミガキを施す。これらは、弥生時代中期後葉に属する。

SZ 11354 出土遺物(16～22) 16・17は弥生土器の壺、18～22は弥生土器の壺である。16は口縁部に刻目、胴部外面は縦方向のハケを施す。20は同一個体2点からなるもので、頸部から胴部上半が残存し、外面には貝殻描直線文と2段階成の貝殻縁線突文を施す。21は同一個体3点からなるもので、胴部上半から底部が残存し、外面には胴部上半に横描直線文、中程から下半にかけてヘラミガキを施す。22は、頸部に2条の刻目を施した貼付突帯が巡る。これらは、弥生時代中期～後葉に属する。

SZ 11488 出土遺物(14) 弥生土器の壺口縁部片で、口縁部の外面全体と内面端部にヘラミガキを施す。弥生時代中期に属するものか。

(2) 古墳時代・飛鳥時代の遺構(第Ⅱ-12・13図)

SD 11358 出土遺物(11・12) 11は、縄文土器の深鉢片で、外面に織形状の沈線を引き入れたもので、縄文時代中期末～後期初頭に属するものか。12は、弥生土器の壺頸部片で、外面に貝殻描直線文を施す。遺構の時期は、飛鳥時代後期と想定されるが、当該時期の遺物は確認できていない。

SD 11489 出土遺物(13) 弥生土器の壺胴部片で、外面に横描直線文が巡る。遺構の時期は、飛鳥時代後期と想定されるが、当該時期の遺物は確認できていない。

SD 11490 出土遺物(15) 弥生土器の壺口縁部片で、口縁部外面に横描波状文が巡り、内面には粘土を貼り付け後にユビオサエを施し、器面を凹凸に仕上げている。遺構の時期は、飛鳥時代後期と想定されるが、当該時期の遺物は確認できていない。

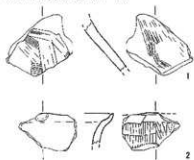
SK 11492 出土遺物(23～27) 23は、土器の瓶底部で、蒸気孔の形態は不明である。古墳時代後期に属するものか。24～27は弥生土器で、24・25・27は壺片で、26は壺の胴部片である。24は口縁部に刻目を施す。26は、胴部に刻目を施した突帯が巡る。

SA 6280 出土遺物(28～32) 28は弥生土器の壺片、29は弥生土器の壺片である。30～32は、P11出土の土器の杯である。30・31は柱掘方出土のもので、口縁部がやや外反する形態。32は柱抜取穴出土の土器杯Aで、外内面をナアで調整するもので、飛鳥時代後期に属する。

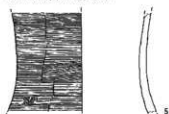
SA 11120 出土遺物(33) P6掘方埋土出土の土器の壺片で、古墳時代後期に属するものか。

SB 11501 出土遺物(34) 弥生土器の壺片で、口縁部に刻目を施す。この他には、図化できない土器小片が出

SK11104 出土遺物 (1~3)



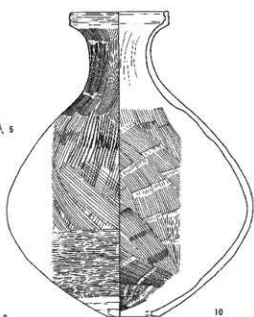
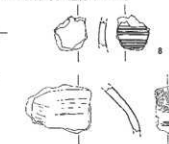
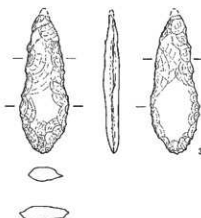
SK11486 出土遺物 (5)



SK11487 出土遺物 (6・7)



SZ11357 出土遺物 (8~10)



SD11489 出土遺物 (13)



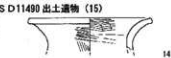
SK11485 出土遺物 (4)



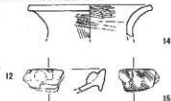
SD11358 出土遺物 (11・12)



SZ11488 出土遺物 (14)



SD11490 出土遺物 (15)

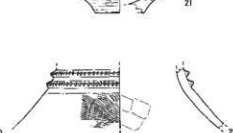
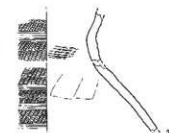
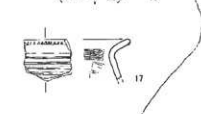
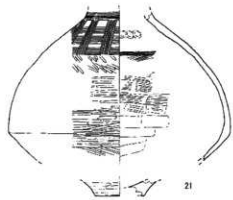
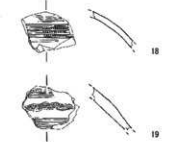
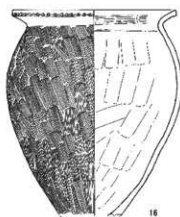


0 S=1/2 10cm

(No 3・4)

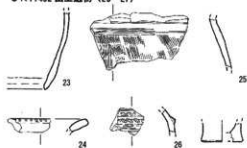
0 S=1/4 20cm

SZ11354 出土遺物 (16~22)



第 II - 12 図 第 200 次調査 出土遺物実測図 1 (1 : 2, 1 : 4)

S K11492 出土遺物 (23~27)



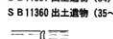
S A6280 出土遺物 (28~32)



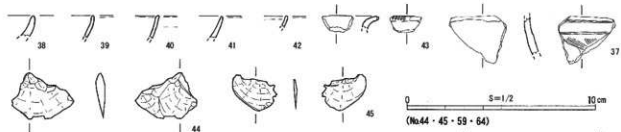
S A11120 出土遺物 (33)



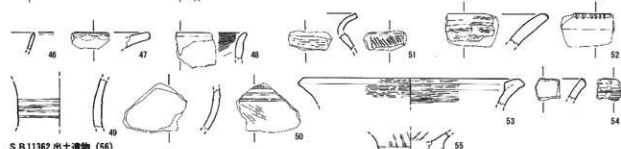
S B11501 出土遺物 (34)



S B11360 出土遺物 (35~55)

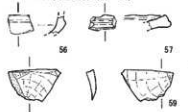


0 S=1/2 10cm
(No.44・45・59・64)



S B11362 出土遺物 (56)

S B11361 出土遺物 (57~61)

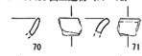


S B6281 出土遺物 (62~68)



S B11502 出土遺物 (70)

S P11496 出土遺物 (71・72)



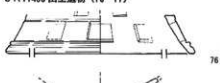
S P11497 出土遺物 (73)



S P11498 出土遺物 (74)



S K11493 出土遺物 (76・77)



S K11494 出土遺物 (75)



0 S=1/4 20cm

第二-13 圖 第20次調査 出土遺物実測圖2 (1:2,1:4)

土している。

SB 11360 出土遺物 (35～55) 35は北廂P1柱痕跡埋土出土の土師器杯Gで、口縁端部を強いナデによりやや外反させる形態のもの。38が北廂P2柱抜取埋土出土の土師器杯片、39～42は北廂P2柱掘方埋土出土の土師器杯片である。46は身舎P7柱抜取埋土出土の土師器杯片である。これらは、飛鳥時代後期に属する。

SB 11362 出土遺物 (56) 土師器の杯体部片で、口縁と体部の境に段がみられる形態のもので、飛鳥時代後期に属するものか。

SB 11361 出土遺物 (57～61) 57・60・61は、弥生土器の壺片、58は弥生土器の甕片である。60の外面には、赤色顔料を塗布した痕跡がみられる。59は、石器の剥片でチャート製のものである。この他に、固化できない土師器小片が出土している。

SB 6281 出土遺物 (62～69) 62は、P6柱抜取埋土出土の土師器の杯Gで、外内面はナデで調整し、底部が丸い形態のもので、7世紀後半～8世紀前半に位置づけられる。63は、P5柱掘方埋土出土のもので、土師器甕の口縁部片である。65はP4柱痕跡埋土出土のもので、土師器甕の口縁部片である。66は、P4柱掘方埋土出土の須恵器甕の体部片で、外面に平行タタキ後に2条の沈線を施す。この他、64はサヌカイト製の石礫である。

SB 11502 出土遺物 (70) P1出土の土師器の杯口縁部片である。飛鳥時代後期に属するものか。

SP 11496 出土遺物 (71・72) 柱痕跡埋土出土のもので、71は弥生土器の甕口縁部片、72は弥生土器の壺口縁部片

である。遺構の時期は、飛鳥時代後期と想定されるが、当該時期の遺物は確認できていない。

SP 11497 出土遺物 (73) 柱掘方埋土出土のもので、弥生土器の壺頸部片で、外面に1条の艶描沈線が巡る。遺構の時期は、飛鳥時代後期と想定されるが、当該時期の遺物は確認できていない。

SP 11498 出土遺物 (74) 弥生土器の壺口縁部片で、口縁端部に刻目、外内面にハケを施す。遺構の時期は、飛鳥時代後期と想定されるが、当該時期の遺物は確認できていない。

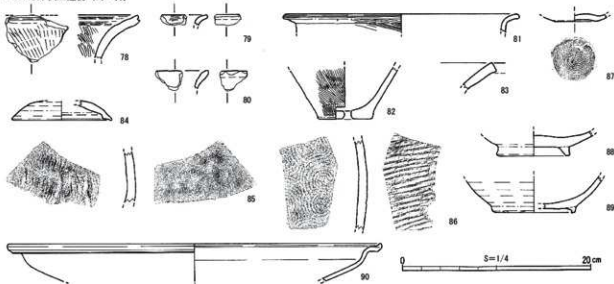
SK 11493 出土遺物 (76・77) 76は、須恵器の陶甕(円面視)の脚部片で、上下2段の長方形透かしを施す。77は、弥生土器の壺底部片で、底部外面には艶描沈線がみられる。

SK 11494 出土遺物 (75) 須恵器の甕体部片で、外面は平行タタキ、内面には同心円文の当て具がみられる。

(3) 江戸時代の遺構 (第Ⅱ-14図)

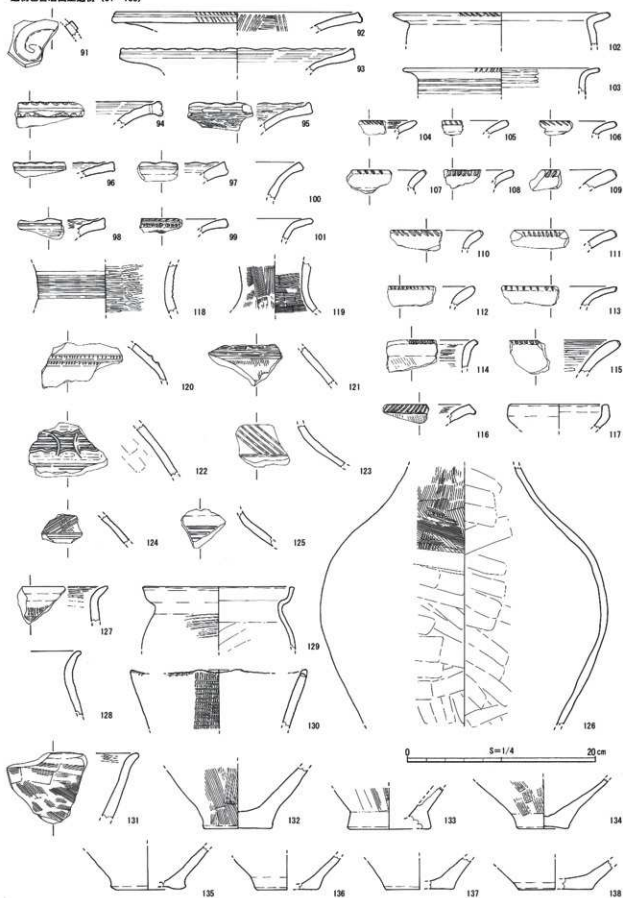
SD 11305 出土遺物 (78～90) 出土遺物には、江戸時代の遺物以外に、弥生時代～鎌倉時代のものが含まれている。78～83は弥生土器である。78は、弥生土器の壺片で口縁端部に沈線が巡り、内面はヘラミガキが施される。82は弥生土器の甕片で、底部には焼成後に施した円形の穿孔がある。84は、須恵器の杯G蓋で、口縁部には返しがある形態のもので、7世紀後半～8世紀前半に位置づけられる。85・86は、須恵器の甕体部片で、85の外表面は平行タタキ後にナデが施される。87は、ロクロ土師器の杯底部片で、回転糸切痕がある。88・89は、陶器の山茶碗で、89の高台には枳殻痕がある。90は、土師器の埴塔で、江

SD11305 出土遺物 (78～90)



第Ⅱ-14図 第200次調査 出土遺物実測図3 (1:4)

遺物包含層出土遺物 (91~138)



第二—15圖 第200次調査 出土遺物実測圖4 (1:4)

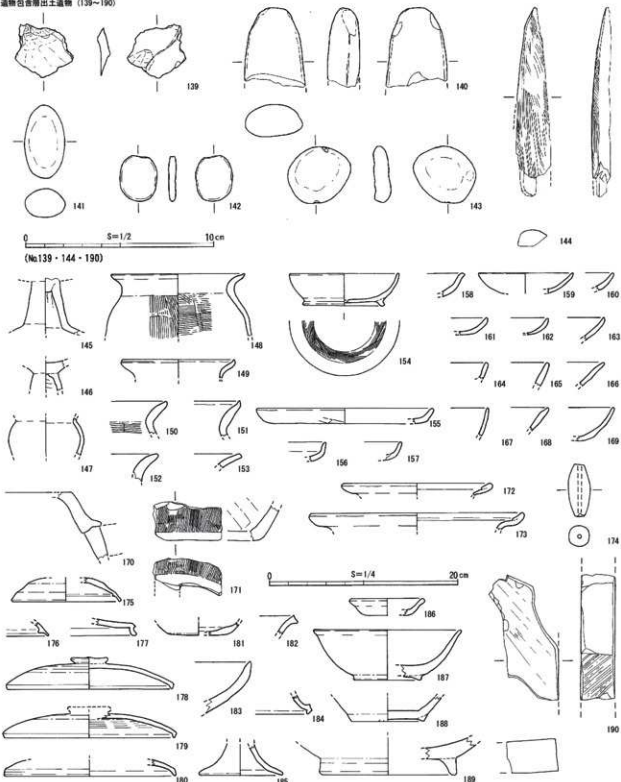
戸時代のもの。

(4) 遺物包含層出土遺物 (第Ⅱ-15・16 図)

遺物包含層出土遺物 [縄文・弥生] (91~144) 縄文時代から弥生時代の遺物には、弥生土器、石製品がある。91

~138は、弥生土器である。92~100は、密口縁部片で口縁端部に沈線が高る。92は、内面に縦方向の笠描沈線とヘラミガキが施される。95・98は、外内面ともヘラミガキがみられる。これらは、金剛坂式に相当するもので、弥生時代前期後葉~中期前葉に属する。

遺物包含層出土遺物 (139~190)

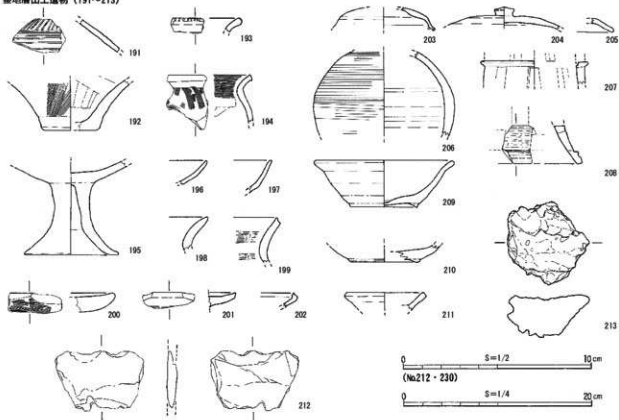


第Ⅱ-16 図 第200次調査 出土遺物実測図5 (1:2, 1:4)

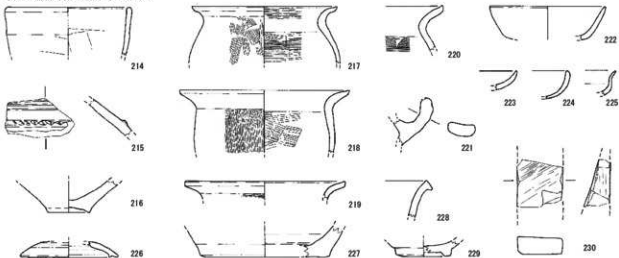
102～115は壺口縁部片で、口縁端部に刻目が施される。103は胴部に3条の匏描沈線がみられる。104・115は、口縁端部には二枚貝刺突による刻目があり、内面にはヘラミガキを施す。116は、壺口縁部片で、口縁端部に二枚貝刺突による刻目がみられる。117は、細頸壺の口縁部片で、受口状口縁の形態のもの。118・119は、壺頸部片である。118は、外面に6条の匏描沈線、内面にヘラミガキが施される。91・120～125は、壺胴部片である。91は、外面に粘土帯の貼り付けによる双頭渦文がみられる。120は外面に刻目を施した2条の突帯が巡る。121は外面に2

条の匏描沈線があり、この間にヘラミガキが施されている。122～125は、外面に匏描直線文や匏描波状文がみられる。126は、頸部から胴部片で、S Z 11357の周溝から北側に30cm程離れた地点で検出したもので、本来は方形周溝墓の周溝に包含されていた可能性が推測される。外面は胴上半がハケ、下半が板ナデとなり、内面は板ナデである。

127～129は壺口縁部片で、129は受口状口縁のものである。130・131は、鉢口縁部片である。130は波状口縁のものともみられ、口縁端部には刻目があり、外面は縦方向に条直を施し、横方向に14条の匏描直線文がある。132



表土・攪乱層出土遺物 (214～230)



第Ⅱ-17図 第200次調査 出土遺物実測図6 (1:2, 1:4)

～138は、壺と壺の底部片である。

139～144は、石製品である。139は石器の剥片で、サマカイト製のもの。140は磨製石斧で砂岩製のもの。141は磨石で、砂岩製のもの。142・143は打欠石錘で、142は1箇所、143は2箇所に打欠がみられる。144は、用途不明石製品の破片で縦方向の擦痕がみられる。

遺物包含層出土遺物〔古墳～鎌倉〕(145～190) 古墳時代から鎌倉時代の遺物には、土師器、須恵器、陶器、土製品、石製品がある。145～173は、土師器である。145・146は高杯脚部片、147は壺胴部片で、古墳時代後期に属するものか。148～153は壺口縁部片で、148～151は口縁端部をつまみ上げる形態のもの。154は杯Bで、S B 11360の南側にあたる調査区(3区c 6グリッド)から出土したものである。高台を接合するために、底部には櫛状工具により沈線を施す。155～157は、皿口縁部片である。155の外面底部にはヘラケズリが施されている。158～169は、杯の口縁部片である。170は、移動式カマドの体部片で、把手が欠損する。171は、瓶底部片で、蒸気孔の形状は半円形になるとみられる。172・173は、南伊勢系土師器の鍋口縁部で、鎌倉時代に属する。174は、土錘で完形のもの。

175～185は、須恵器である。175・176は、杯G蓋で口縁部に返しが見られる。177～180は、杯B蓋で、口縁部に返しに伴わないものである。181は、杯身片で底部外面はヘラ切後ナデを施している。182は、壺口縁部片とみられる。183は、碗の口縁部から体部片で、内面と破断面に煤が付着する。184・185は高杯脚部片とみられる。

186～189は、中世陶器である。186は小皿、187・188は山茶碗、189は鉢である。

190は砥石で、側面の内2面を使用し、1面は加工時に石材を切断した工具痕が残る。

(5) 整地層出土遺物(第二一七図) 1・3・4区の整地層からは、弥生時代から江戸時代の遺物が出土しており、弥生土器、土師器、須恵器、陶硯、陶器、石製品、金属製品がある。

191～194は弥生土器で、191・192は壺で、193・194は壺である。191は肩部に篋描沈線による施文がみられる。

195～202は土師器で、195は高杯、196・197は杯、198・199は壺である。200・201は罎部の破片で、器種の詳細は不明である。202は南伊勢系土師器鍋の口縁部片で、

室町時代以降のものか。

203～206は須恵器で、203～205は杯蓋、206は壺胴部である。203は口縁部に返しに伴うものである。206は胴部外面にカキメが施される。207・208は、須恵器の陶硯(円面硯)である。脚部片で、上下2段の長方形透かしがみられる。208は外面にカキメを施す。207はS A 11120(掘立柱塼北辺)、208はS B 6281(西第二堂(新))の付近で出土したものである。

209～211は、中世陶器である。209・210は山茶碗、211は小皿で、鎌倉時代に属するもの。

212は、緑色片岩製の剥片である。213は、椀形織治漆で、鉄滓とみられる。

(6) 表土・攪乱等出土遺物(第二一七図) 214は、縄文土器の鉢である。内外の器面が黒色化しており、光沢がみられる。215・216は、弥生土器の壺である。215は肩部に3条の篋描沈線と刻目を施した貼付突起が巡る。

217～225は土師器で、217～220は壺、221は瓶か鍋の把手片、222～225は杯である。

226～228は須恵器で、226は杯蓋、227は壺底部片、228は壺口縁部片である。229は、白磁の底部片で、削出高台のもの。230は砥石で、側面の内3面を使用する。

5 まとめ

第200次調査では、斜方位区画の堀立柱塼の一部と西門、正殿と脇殿相当の建物等の構造を理解するうえで、重要な調査成果を得られた。当該調査を含め、平成29年度から令和3年度にかけて実施した史跡西部の中垣内地区の調査では、飛鳥時代齋宮中区域と推定される斜方位区画や倉院の詳細な規模や変遷等に関する詳細な成果を得られた。これらの調査成果は、令和4年度に刊行予定の『齋宮跡発掘調査報告V』で総括を行い、調査成果を公表していく。

また、今後の調査課題には、斜方位区画の南辺・南門の範囲、東西第三堂にあたる殿舎の把握、斜方位区画の周辺域での関連施設の把握が挙げられる。この他、飛鳥時代の斜方位区画と隣接して、奈良時代の方形区画が存在するが、内部構造については未調査のため判明していない。こうした課題は、令和4年度以降の継続課題とし、飛鳥から奈良時代にかけての齋宮の成立過程や方形区画の実態解明を進めていきたい。

番号	器種	器形	遺構	法庫(cm)	調整・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考	登録番号
1	弥生土器	壺	SK11104	残存高 5.6	外面 ヘラミダキ 内面 ハケミダキ	密良	黒灰 10YR4/1	-	-	001-2	
2	弥生土器	甕	SK11104	残存高 3.3	外面 ナデ・ハケ ナデ・ユビオサエ	密良	灰黄緑 10YR5/2	口縁部 1/12 未調査	-	001-1	
3	石製品	有蓋先筒形器	SK11104	残存長 幅 厚 3.4 2.6 0.7	蓋 石種 16.28 g ヤヌカイト	-	-	-	-	034-1	
4	石製品	薄片	SK11485	長さ 幅 厚 3.4 2.5 0.5	蓋 石種 2.06 g ヤヌカイト	-	-	-	-	034-6	
5	弥生土器	壺	SK11486	器定高 残存高 13.6 10.6	外面 貝殻掻き文 ナデ	密良	にぶい黄緑 10YR7/4	-	-	010-6	
6	弥生土器	甕	SK11487	残存高 0.8	外面 ナデ	密良	黒 5YR6/6	口縁部 1/12 未調査	-	011-3	
7	弥生土器	壺	SK11487	器定高 残存高 5.6 1.9	外面 ナデ	密良	黒 5YR6/6	底部 3/12	-	011-4	
8	弥生土器	壺	SZ11357	残存高 2.8	外面 貝殻掻き文 ナデ	密良	にぶい黄緑 10YR7/3	-	-	001-5	
9	弥生土器	壺	SZ11357	残存高 4.9	外面 ハケ後ヘラミダキ ナデ	密良	にぶい黄緑 7.5YR7/4	-	-	001-4	
10	弥生土器	壺	SZ11357	口縁 器高 底径 9.8 32.2 3.4	外面 ナデ・ハケ・ヘラミダキ・ 鹿撫沈線 ナデ・ハケ	密良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 9/12 胴部 9/12	-	013-1	
11	縄文土器	深鉢	SD11358	残存高 5.6	外面 ナデ・沈線 ナデ	密良	にぶい黒 7.5YR6/4	-	-	006-5	
12	弥生土器	壺	SD11358	器定高 残存高 10.6 6.2	外面 ナデ・貝殻掻き文 ナデ	密良	灰黄緑 10YR5/2	胴部 1/12	-	006-3	
13	弥生土器	壺	SD11489	器定高 残存高 17.0 5.2	外面 ナデ・鹿撫沈線 ナデ	密良	灰黄緑 10YR6/2	胴部 1/12	-	006-2	
14	弥生土器	甕	SZ11488	器定高 残存高 12.8 3.4	外面 ナデ・ハケ・ヘラミダキ ハケ・ヘラミダキ	密良	灰黄緑 10YR5/2	口縁部 1/12	-	009-6	
15	弥生土器	壺	SD11490	残存高 1.4	外面 ナデ・鹿撫沈線 ナデ	密良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未調査	-	006-4	
16	弥生土器	甕	SZ11354	口縁 残存高 17.2 21.7	外面 ナデ・ハケ・刷目 ナデ	密良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 7/12	-	012-1	
17	弥生土器	甕	SZ11354	残存高 4.4	外面 ナデ・鹿撫沈線・刷目 ナデ	密良	にぶい黒 7.5YR7/4	口縁部 1/12 未調査	-	010-1	
18	弥生土器	壺	SZ11354	残存高 4	外面 ハケ後鹿撫沈線・ ヘラミダキ 内面 ナデ	密良	にぶい黄緑 10YR7/4	-	-	009-5	
19	弥生土器	壺	SZ11354	残存高 5.8	外面 ナデ・鹿撫沈線・ 鹿撫沈線文 ナデ	密良	にぶい黒 5YR7/4	-	-	010-2	
20	弥生土器	壺	SZ11354	胴径 残存高 10.5 12.5	外面 貝殻掻き文・ ナデ・ハケ 内面 ナデ	密良	にぶい黒 7.5YR7/4	胴部 3/12	-	022-3 032-4	
21	弥生土器	壺	SZ11354	器定高 残存高 23.5 5	外面 ナデ・ヘラミダキ・ 鹿撫沈線文 内面 ナデ・ナデ・ユビオサエ	密良	にぶい黄緑 10YR6/3	胴部 3/12	-	031-2 032-1・ 2	
22	弥生土器	壺	SZ11354	残存高 6.7	外面 ナデ・ハケ・貼付突帯・刷目 ナデ	密良	灰黄緑 10YR6/2	胴部 1/12	-	010-3	
23	土師器	瓶	SK11492	残存高 8.2	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ	密良	黒 7.5YR7/6	底部 1/12 未調査	外面に備付着	011-2	
24	弥生土器	甕	SK11492	残存高 1.4	ナデ・刷目 ナデ	密良	黒 7.5YR7/6	口縁部 1/12 未調査	-	011-1	
25	弥生土器	甕	SK11492	残存高 5.4	ナデ・ハケ・鹿撫沈線 ナデ	密良	にぶい黒 7.5YR6/4	-	-	011-7	
26	弥生土器	壺	SK11492	残存高 2.5	外面 ヘラミダキ・鹿撫沈線・ 貼付突帯・刷目 内面 ナデ	密良	黒 5YR6/6	-	-	011-5	
27	弥生土器	甕	SK11492	器定高 残存高 4 2	外面 ナデ 内面 ナデ	密良	黒 7.5YR7/6	底部 4/12	-	011-6	
28	弥生土器	甕	SA6280 P5 柱状取理土	残存高 2.2	外面 ナデ・鹿撫沈線・刷目 ナデ	密良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未調査	-	009-2	
29	弥生土器	甕	SA6280 P12 柱状取理土	残存高 4	外面 ナデ・鹿撫沈線・貼付突帯 ナデ	密良	にぶい黒 7.5YR6/4	-	-	009-1	
30	土師器	杯	SA6280 P11 柱状取理土	残存高 2.4	外面 ナデ 内面 ナデ	密良	黒 7.5YR7/6	口縁部 1/12 未調査	-	008-3	
31	土師器	杯	SA6280 P11 柱状取理土	残存高 1.7	ナデ ナデ	密良	黒 5YR6/8	口縁部 1/12 未調査	-	008-4	
32	土師器	杯	SA6280 P11 柱状取理土	器定高 器高 15 2.8	外面 ナデ 内面 ナデ	密良	明赤帯 5YR6/6	口縁部 1/12	-	008-1	
33	土師器	甕	SA11120 P6 脚方理土	残存高 2.1	ナデ ナデ・ハケ	密良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未調査	-	001-3	
34	弥生土器	甕	SB11501 P2 柱状理土	残存高 1.8	外面 ナデ・刷目 ナデ	密良	にぶい黒 7.5YR7/4	口縁部 1/12 未調査	-	009-3	
35	土師器	杯	SD11360 北側 P1 柱状理土	残存高 4.6	外面 ナデ 内面 ナデ	密良	にぶい黒 5YR6/4	口縁部 1/12 未調査	-	004-2	
36	弥生土器	甕	SD11360 北側 P1 柱状理土	残存高 1.5	外面 ナデ 内面 不明	密良	にぶい黄緑 10YR7/4	底部 1/12 未調査	内面調査	004-4	
37	弥生土器	壺	SD11360 北側 P1 柱状理土	残存高 4.1	外面 ナデ・ヘラミダキ・貼付突帯 内面 ナデ	密良	灰黄緑 10YR5/2	-	貼付突帯は調査 する	004-3	
38	土師器	杯	SB11360 北側 P2 柱状取理土	残存高 2.2	外面 ナデ 内面 ナデ	密良	黒 5YR6/6	口縁部 1/12 未調査	-	004-6	

第Ⅱ-3表 第200次調査 遺物観察表 1

番号	部種	部形	遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
39	土師器	杯	SB11360 北瀬 P2 柱状取土	残存高 24	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	靑 5YR6-6	口縁部 1/12 未満			004-9
40	土師器	杯	SB11360 北瀬 P2 柱状取土	残存高 24	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	靑 5YR6-6	口縁部 1/12 未満			004-7
41	土師器	杯	SB11360 北瀬 P2 柱状取土	残存高 24	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	靑 5YR7-6	口縁部 1/12 未満			004-8
42	土師器	杯	SB11360 北瀬 P2 柱状取土	残存高 23	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	靑 5YR6-6	口縁部 1/12 未満			005-1
43	弥生土器	甕	SB11360 北瀬 P2 柱状取土	残存高 14	外面 ナテ・刷目 内面 ナテ	密 貞	黄灰黄 2.5Y5/2	口縁部 1/12 未満			004-5
44	石製品	測片	SB11360 北瀬 P2 柱状取土	長さ 23 幅 33 厚 0.5	288 g 石材 サマコイト	-	-	-	-		004-4
45	石製品	測片	SB11360 北瀬 P2 柱状取土	長さ 19 幅 24 厚 0.15	0.72 g 石材 サマコイト	-	-	-	-		004-5
46	土師器	杯	SB11360 P7 柱状取土	残存高 18	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	淡黄 2.5Y8/4	口縁部 1/12 未満			003-2
47	弥生土器	甕	SB11360 P7 柱状取土	残存高 15	外面 ナテ・スビオササ・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	明黄緑 10YR7/6	口縁部 1/12 未満			007-8
48	弥生土器	甕	SB11360 P7 柱状取土	残存高 29	外面 ナテ 内面 ハケ	密 貞	靑 5YR6-6	口縁部 1/12 未満			007-7
49	弥生土器	甕	SB11360 P7 柱状取土	想定残存 5.2	外面 ナテ・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未満			007-6
50	弥生土器	甕	SB11360 P7 柱状取土	残存高 48	外面 ナテ・ハケ・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	靑 7.5YR7/6	口縁部 1/12 未満	外面に黒付着		003-3
51	土師器	甕	SB11360 P8 柱状取土	残存高 39	外面 ナテ・ハケ 内面 ナテ	密 貞	靑 7.5YR7/6	-			003-4
52	弥生土器	甕	SB11360 P9 柱状取土	残存高 34	外面 ナテ・刷目 内面 ハケ後ナテ	密 貞	靑 7.5YR7/6	口縁部 1/12 未満			003-5
53	弥生土器	甕	SB11360 P9 柱状取土	想定残存 22.5	外面 ヘラムミガキ 内面 ヘラムミガキ	密 貞	灰黄緑 10YR5/2	口縁部 1/12 未満			003-6
54	弥生土器	甕	SB11360 P9 柱状取土	残存高 22	外面 ナテ・刷目・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・靑 7.5YR6/4	口縁部 1/12 未満			004-1
55	弥生土器	甕	SB11360 P9 柱状取土	想定残存 6.5	外面 ナテ・ハケ 内面 ハケ	密 貞	1.65Y・黄緑 10YR7/4	底部 2/12			003-7
56	土師器	杯	SB11362 P4 柱状取土	残存高 13	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	靑 5YR6-6	-			009-7
57	弥生土器	甕	SB11361 P7・8 柱状取土	残存高 8	外面 ナテ・ハケ・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	靑 7.5YR7/6	口縁部 1/12 未満			010-5
58	弥生土器	甕	SB11361 P7・8 柱状取土	残存高 19	外面 ナテ・刷目 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未満			010-4
59	石製品	測片	SB11361 P7・8 柱状取土	長さ 28 幅 12 厚 0.5	213 g 石材 サマコイト	-	-	-	-		004-8
60	弥生土器	甕	SB11361 P9 柱状取土	残存高 24	外面 ナテ・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	淡黄緑 10YR8/4	-	外面に赤色黒付着		009-8
61	弥生土器	甕	SB11361 P11 柱状取土	残存高 34	外面 ナテ・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	靑 5YR6-6	口縁部 1/12 未満			007-1
62	土師器	杯	SB6281 P6 柱状取土	想定残存 3.8	外面 ナテ 内面 ナテ	密 不貞	灰白 2.5Y8/2	口縁部 1/12			009-4
63	土師器	甕	SB6281 P5 柱状取土	残存高 19	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	靑 7.5YR7/6	口縁部 1/12 未満			008-5
64	石製品	石楕	SB6281 P4 柱状取土	長さ 20 幅 15 厚 0.25	0.7 g 石材 サマコイト	-	-	-	-		004-2
65	土師器	甕	SB6281 P4 柱状取土	残存高 23	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・靑 7.5YR6/4	口縁部 1/12 未満			008-7
66	須恵器	甕	SB6281 P4 柱状取土	残存高 78	外面 タタキ・沈線 内面 当て具後ナテ	密 貞	黄灰 2.5Y6/1	-			008-6
67	弥生土器	甕	SB6281 P6 柱状取土	残存高 18	外面 ナテ・ヘラムミガキ 内面 スビオササ・黒染沈線 ナテ後ヘラムミガキ	密 貞	1.65Y・靑 7.5YR5/3	口縁部 1/12 未満			008-2
68	弥生土器	甕	SB6281 P6 柱状取土	残存高 51	外面 ナテ・刷目 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・黄緑 10YR5/3	口縁部 1/12 未満			008-9
69	弥生土器	甕	SB6281 P6 柱状取土	残存高 18	外面 ナテ・刷目 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・黄緑 10YR5/3	口縁部 1/12 未満			008-8
70	土師器	杯	SB11502 P1	残存高 19	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	靑 5YR6-6	口縁部 1/12 未満			027-5
71	弥生土器	甕	SP11496 柱状取土	残存高 18	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・黄緑 10YR7/3	口縁部 1/12 未満			005-2
72	弥生土器	甕	SP11496 柱状取土	残存高 31	外面 ナテ 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・靑 7.5YR7/4	口縁部 1/12 未満			005-3
73	弥生土器	甕	SP11497 柱状取土	残存高 6	外面 ナテ・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未満			007-2
74	弥生土器	甕	SP11498	残存高 35	外面 ナテ・ハケ・刷目 内面 ナテ・ハケ	密 貞	1.65Y・靑 7.5YR6/4	口縁部 1/12 未満			028-2
75	須恵器	甕	SK11494	残存高 89	外面 タタキ 内面 当て具後	密 貞	黄灰 2.5Y5/1	-			027-1
76	須恵器	陶製 内面観	SK11493	底径 任意 残存高 4.1	外面 ロコロナテ・長方形透かし 内面 ロコロナテ・長方形透かし	密 貞	灰白 5Y7/1	底部 1/12 未満		透かし 2 段以上、外面白灰付着	002-1
77	弥生土器	甕	SK11493	想定底径 8.6 残存高 2.2	外面 ナテ・黒染沈線 内面 ナテ	密 貞	1.65Y・黄緑 10YR7/4	底部 2/12		外面底部に黒染沈線	001-6

第Ⅱ-4表 第200次調査 遺物観察表2

番号	器種	器形	遺構	法庫(cm)	調整・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考	登録番号
78	赤生土器	壺	SD1305	残存高 4.7	外面 ナデ、ハケ後ナデ 内面 ナデ、ヘラミガキ	赤	良	にぶい黄緑 10YR6/3	口縁部 1/12 未残		001-7
79	赤生土器	甕	SD1305	残存高 1.1	外面 ナデ 内面 ハケ	赤	良	灰黄緑 10YR5-2	口縁部 1/12 未残		002-3
80	赤生土器	甕	SD1305	残存高 2.1	外面 ナデ 内面 ナデ	赤	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12 未残		002-4
81	赤生土器	甕	SD1305	鑑定口径 24.3 残存高 2	外面 ナデ、ハケ、炭掻沈線 内面 ナデ	赤	良	灰黄緑 10YR6-2	口縁部 1/12		006-1
82	赤生土器	甕	SD1305	新径 3.6 残存高 3.5	外面 ナデ、ハケ 内面 ナデ	赤	良	にぶい黄緑 10YR7/3	口縁部 1/12		005-8
83	赤生土器	鉢	SD1305	残存高 2.9	外面 ナデ 内面 ナデ	赤	良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未残		002-2
84	黒須器	杯蓋	SD1305	鑑定口径 10.3 残存高 2	外面 ロクロナデ・ロクロナズリ ナデ、ロクロナデ	赤	良	黄灰 2.5Y6-1	口縁部 1/12		005-7
85	黒須器	甕	SD1305	残存高 5.5	外面 クタキ後ナデ 内面 炭て具痕	赤	良	灰黄 2.5Y6-2	-		002-6
86	黒須器	甕	SD1305	残存高 9.5	外面 クタキ 内面 炭て具痕	赤	良	黄灰 2.5Y6-1	-		003-1
87	ロクロナ 土師器	杯	SD1305	口径 4.3 残存高 0.8	外面 ロクロナデ・回転非切 内面 ロクロナデ	赤	良	明黄緑 10YR7-6	底部定形		002-5
88	陶器	山茶桶	SD1305	新径 2.6 残存高 2.6	外面 ロクロナデ、貼付高台・ 糸切痕 内面 ロクロナデ	赤	良	灰黄 2.5Y7-2	底部 11/12		005-5
89	陶器	山茶桶	SD1305	鑑定口径 8 残存高 3.9	外面 ロクロナデ、貼付高台・ 糸切痕 内面 ロクロナデ	赤	良	灰黄 2.5Y7-2	底部 2/12		005-4
90	土師器	埴輪	SD1305	鑑定口径 39.5 残存高 4	外面 ナデ 内面 ナデ	赤	良	橙 5YR6-6	口縁部 1/12		005-6
91	赤生土器	壺	F10y4 包含層	残存高 3.5	外面 ナデ、粘土帶貼付 ナデ	赤	良	橙 7.5YR6-6	-		024-6
92	赤生土器	壺	F10y4 包含層	鑑定口径 25.7 残存高 2	外面 ナデ、炭掻沈線、刷目 内面 炭掻沈線、ヘラミガキ	赤	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12		024-4
93	赤生土器	壺	F9a1 包含層	鑑定口径 24.4 残存高 2.5	外面 ナデ、ユビオサエ、炭掻沈線 ナデ	赤	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12		025-8
94	赤生土器	壺	G10a5 包含層	残存高 2.5	外面 ナデ、炭掻沈線、刷目、線穴 内面 ナデ、ヘラミガキ	赤	良	明赤褐 2.5YR5-6	口縁部 1/12		016-7
95	赤生土器	壺	G10a5 包含層	残存高 3	外面 ナデ、ハケ後ヘラミガキ・ ユビオサエ、炭掻沈線 内面 ナデ後ヘラミガキ	赤	良	にぶい橙 5YR6/4	口縁部 1/12 未残		019-5
96	赤生土器	壺	F10y4 包含層	残存高 1.5	外面 ナデ、ユビオサエ、炭掻沈線 内面 ナデ	赤	良	橙 5YR6-6	口縁部 1/12 未残		023-8
97	赤生土器	壺	G10a4 包含層	残存高 2	外面 ナデ、ユビオサエ、炭掻沈線 内面 ナデ	赤	良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未残		019-2
98	赤生土器	壺	G10a7 包含層	残存高 2	外面 ナデ、ヘラミガキ・ ユビオサエ、炭掻沈線 内面 ナデ後ヘラミガキ	赤	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12 未残		022-2
99	赤生土器	壺	F10y4 包含層	残存高 1.5	外面 ナデ、ハケ、炭掻沈線・ 刷目 内面 ナデ	赤	良	にぶい黄緑 10YR7/3	口縁部 1/12 未残		024-1
100	赤生土器	壺	G10a5 包含層	残存高 4	外面 ナデ、ハケ後ナデ、炭掻沈線 内面 ナデ	赤	良	灰黄緑 10YR6-2	口縁部 1/12 未残		018-6
101	赤生土器	甕	G10a4 包含層	残存高 3.2	外面 ナデ、ハケ 内面 ナデ	赤	良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未残		019-3
102	赤生土器	甕	G10a6 包含層	鑑定口径 22.4 残存高 3.6	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	にぶい黄緑 10YR4/3	口縁部 1/12		022-7
103	赤生土器	甕	G10a7 包含層	鑑定口径 20.2 残存高 2.9	外面 ナデ、炭掻沈線、刷目 内面 ヘラミガキ	赤	良	にぶい黄緑 10YR6/3	口縁部 1/12		022-8
104	赤生土器	甕	G10a7 包含層	残存高 1.5	外面 ナデ、刷目 内面 ヘラミガキ	赤	良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未残	刷目は貝殻焼	022-4
105	赤生土器	甕	G10a6 包含層	残存高 1.5	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12 未残		017-6
106	赤生土器	甕	G10a6 包含層	残存高 1.5	外面 ナデ、刷目 内面 ヘラミガキ	赤	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12 未残		014-7
107	赤生土器	甕	G10a7 包含層	残存高 2.9	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	橙 7.5YR6-6	口縁部 1/12 未残		022-3
108	赤生土器	甕	G10a7 包含層	残存高 2	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	灰黄緑 10YR5-2	口縁部 1/12 未残		022-5
109	赤生土器	甕	G10a6 包含層	残存高 2	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12 未残		017-5
110	赤生土器	甕	G10a4 包含層	残存高 2	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	にぶい黄緑 10YR6-3	口縁部 1/12 未残		019-1
111	赤生土器	甕	G10a5 包含層	残存高 2	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12 未残		019-6
112	赤生土器	甕	G10a5 包含層	残存高 2	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未残		022-6
113	赤生土器	甕	F10y4 包含層	残存高 2	外面 ナデ、刷目 内面 ナデ	赤	良	黄黄緑 7.5YR8-4	口縁部 1/12 未残		023-7
114	赤生土器	甕	G10a6 包含層	残存高 3	外面 ナデ、ハケ、刷目 内面 ナデ、ハケ	赤	良	灰黄緑 10YR5-2	口縁部 1/12 未残		014-6
115	赤生土器	甕	F10y4 包含層	残存高 3.5	外面 ナデ、刷目 内面 ハケ後ヘラミガキ	赤	良	にぶい赤褐 5YR5/4	口縁部 1/12 未残	刷目は貝殻焼	023-6
116	赤生土器	壺	F10a5 包含層	残存高 2	外面 ナデ、ハケ、刷目 内面 ナデ、ハケ	赤	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12 未残	刷目は貝殻焼	018-4

第Ⅱ-5表 第200次調査 遺物観察表3

番号	器種	器形	遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	粘土	構成	色調	残存度	備考	登録番号
117	弥生土器	甕	F104 Ⅱ 包含層	器口径 30 残存高 20	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	靑 5YR6-6	口縁部 1/12		024-3
118	弥生土器	甕	F105 Ⅴ 包含層	器口径 144 残存高 52	器口縁部 ナデ・簡線沈線 内面 ヘラミガキ	密	貝	にぶい 黄緑 10YR7/4	-		017-7
119	弥生土器	甕	G106 Ⅵ 包含層	器口径 144 残存高 54	外面 ハケ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 靑 75YR6/4	-		006-6
120	弥生土器	甕	F104 Ⅳ 包含層	残存高 4	外面 ナデ・貼付突帯・頸口 内面 ナデ	密	貝	にぶい 靑緑 10YR7/4	-		017-8
121	弥生土器	甕	G107 Ⅶ 包含層	残存高 8	外面 ナデ・板ナデ・ヘラミガキ・ 内面 簡線沈線 ナデ	密	貝	灰黄緑 10YR5/2	-		016-3
122	弥生土器	甕	G107 Ⅶ 包含層	残存高 58	外面 ヘラミガキ・簡線直線文・ 内面 簡線沈線 ナデ	密	貝	灰黄緑 10YR4/2	-		015-5
123	弥生土器	甕	G107 Ⅶ 包含層	残存高 45	外面 ナデ・簡線沈線 内面 ナデ・ヘラミガキ	密	貝	にぶい 靑 75YR6/4	-		021-9
124	弥生土器	甕	G105 Ⅴ 包含層	残存高 35	外面 ハケ・簡線沈線 内面 ナデ	密	貝	にぶい 靑緑 10YR6/3	-	内面摩耗	018-7
125	弥生土器	甕	G106 Ⅵ 包含層	残存高 38	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	浅黄緑 75YR8/4	-		016-4
126	弥生土器	甕	G101 Ⅲ 包含層 表土部	器口径 304 残存高 225	外面 ナデ・板ナデ 内面 板ナデ	密	貝	靑 75YR7/6	底部 1/12		030-1 031-1
127	弥生土器	甕	F105 Ⅴ 包含層	残存高 33	外面 ナデ・ハケ・簡線沈線 内面 ヘラミガキ	密	貝	にぶい 靑 75YR6/4	口縁部 1/12 未達		018-3
128	弥生土器	甕	G104 Ⅳ 包含層	残存高 68	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	浅黄緑 10YR8/3	口縁部 1/12 未達	外面に煤付着	019-4
129	弥生土器	甕	G106 Ⅵ 包含層	口径 154 残存高 62	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ・土直ナデ	密	貝	淡黄 2.5YR/3	口縁部 6/12	外面に煤付着	018-2
130	弥生土器	鉢	G105 Ⅴ 包含層	器口径 184 残存高 62	外面 ナデ・ハケ・簡線直線文 内面 ナデ	密	貝	にぶい 靑 75YR5/3	口縁部 1/12		018-5
131	弥生土器	鉢	G105 Ⅴ 包含層	残存高 7	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ・ハケ・板ナデ	密	貝	靑 25YR6/6	口縁部 1/12 未達		016-5
132	弥生土器	甕	G105 Ⅴ 包含層	器口径 72 残存高 64	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 靑 75YR5/4	底部 7/12		021-6
133	弥生土器	甕	F107 Ⅷ 包含層	器口径 83 残存高 44	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ	粗	貝	靑 5YR6-6	底部 2/12	内面磨耗	017-9
134	弥生土器	甕	G106 Ⅵ 包含層	器口径 49 残存高 52	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 黄緑 10YR7/4	底部彩色		023-5
135	弥生土器	甕	F104 Ⅳ 包含層	器口径 68 残存高 45	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 黄緑 10YR7/4	底部 3/12		024-5
136	弥生土器	甕	G106 Ⅵ 包含層	器口径 64 残存高 36	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 靑 75YR6/4	底部 3/12		015-6
137	弥生土器	甕	G104 Ⅳ 包含層	器口径 79 残存高 33	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	靑 10YR8/2	底部 5/12	内面磨耗	021-7
138	弥生土器	甕	F104 Ⅳ 包含層	器口径 76 残存高 31	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 黄緑 10YR6/3	底部 5/12		024-2
139	石製品	酒片	G106 Ⅵ 包含層	長 24 幅 31 厚 0.65	外周 4.77 g 石ナカイト	-	-	-	-		034-7
140	石製品	磨製石片	G106 Ⅵ 包含層	残存長 8.5 幅 6.5 厚 3.4	長さ 361 g 石材 砂岩	-	-	-	-		033-5
141	石製品	磨石	G106 Ⅵ 包含層	長 7.7 幅 7.0 厚 0.8	長さ 143 g 石材 砂岩	-	-	-	-		033-4
142	石製品	石鉢	G106 Ⅵ 包含層	長 49 幅 19 厚 0.8	長さ 19.05 g 石材 花崗岩	-	-	-	-		033-6
143	石製品	石鉢	G106 Ⅵ 包含層	長 61 幅 6.7 厚 1.67	長さ 90.76 g 石材 花崗岩	-	-	-	-		033-3
144	石製品	用途不明品	G106 Ⅵ 包含層	残存長 101 幅 18 厚 0.19	長さ 1663 g 石材 頁岩?	-	-	-	-		034-3
145	土師器	高杯	F107 Ⅷ 包含層	残存高 8	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	浅黄緑 10YR8/4	-		023-1
146	土師器	高杯	F107 Ⅷ 包含層	残存高 33	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	靑 5YR6-6	-		022-9
147	土師器	甕	F106 Ⅴ 包含層	器口径 42 残存高 66	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 黄緑 10YR7/4	-		017-3
148	土師器	甕	F104 Ⅳ 包含層	器口径 14 残存高 66	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ・ハケ	密	貝	にぶい 靑 75YR7/4	口縁部 1/12	外面に煤付着	024-7
149	土師器	甕	F106 Ⅴ 包含層	器口径 118 残存高 2	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12		023-4
150	土師器	甕	G106 Ⅵ 包含層	残存高 33	外面 ナデ 内面 ナデ・ハケ	密	貝	にぶい 黄緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未達		016-2
151	土師器	甕	F106 Ⅴ 包含層	残存高 38	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	にぶい 靑 75YR7/4	口縁部 1/12 未達		025-4
152	土師器	甕	G102 Ⅱ 包含層	残存高 29	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	靑 5YR6-6	口縁部 1/12 未達		015-7
153	土師器	甕	F106 Ⅴ 包含層	残存高 12	外面 ナデ 内面 ナデ	密	貝	靑 75YR6/6	口縁部 1/12 未達		017-4
154	土師器	杯	G106 Ⅵ 包含層	口径 114 底径 81 器高 33	外面 ナデ・複合沈線 内面 ナデ	密	貝	靑 25YR6/8	口縁部 6/12	高台貼付のため沈線消失	007-4

第Ⅱ-6表 第200次調査 遺物観察表4

番号	器種	器形	遺構	法基(cm)	調査・技法の特徴		胎土	構成	色調	残存度	備考	登録番号
155	土師器	皿	F9a1 包含層	帯定口径 185 器高 16	外面 ナデ	ナデ・ハラケズリ	赤良	黄 5YR6/8		口縁部 1/12		025-5
156	土師器	皿	F9a1 包含層	残存高 2	外面 ナデ	ナデ・ハラケズリ	赤良	黄 5YR6/8		口縁部 1/12 未測		026-2
157	土師器	皿	F9a1 包含層	残存高 2	外面 ナデ	ナデ	赤良	黄 5YR6-8		口縁部 1/12 未測		025-6
158	土師器	杯	F10y7 包含層	残存高 25	外面 ナデ	ナデ・ハラケズリ	赤良	黄 5YR6-6		口縁部 1/12 未測		018-1
159	土師器	杯	G10a5 包含層	帯定口径 99 器高 22	外面 ナデ	ナデ	赤小 赤良	灰白 2.5YR-2		口縁部 3/12		021-5
160	土師器	杯	G10a5 包含層	残存高 19	外面 ナデ	ナデ	赤良	にぶい黄橙 10YR7/4		口縁部 1/12 未測		016-6
161	土師器	杯	G10a6 包含層	残存高 18	外面 ナデ	ナデ	赤良	にぶい橙 7.5YR7/4		口縁部 1/12 未測		017-2
162	土師器	杯	G10a6 包含層	残存高 18	外面 ナデ	ナデ	赤良	にぶい橙 7.5YR7/4		口縁部 1/12 未測		017-1
163	土師器	杯	F10y7 包含層	残存高 25	外面 ナデ	ナデ	赤良	黄 7.5YR6-6		口縁部 1/12 未測		023-3
164	土師器	杯	F9a1 包含層	残存高 18	外面 ナデ	ナデ	赤良	黄 5YR6-6		口縁部 1/12 未測		019-8
165	土師器	杯	F9a25 包含層	残存高 25	外面 ナデ	ナデ	赤良	黄 7.5YR7/6		口縁部 1/12 未測		025-3
166	土師器	杯	F9a1 包含層	残存高 25	外面 ナデ	ナデ	赤良	明黄橙 5YR5-6		口縁部 1/12 未測		025-7
167	土師器	杯	F9a25 包含層	残存高 3	外面 ナデ	ナデ	赤良	黄 5YR6-6		口縁部 1/12 未測		019-9
168	土師器	杯	F9a25 包含層	残存高 25	外面 ナデ	ナデ	赤良	黄 5YR6-6		口縁部 1/12 未測		019-7
169	土師器	杯	G10a2 包含層	残存高 35	外面 ナデ	ナデ	赤良	黄 7.5YR7/2		口縁部 1/12 未測		013-8
170	土師器	移動式 コボト	F10y7 包含層	残存高 71	外面 ナデ	ナデ	赤良	明黄橙 10YR7/6		-	把手欠損	023-2
171	土師器	瓶	G10g2 包含層	残存高 37	外面 ナデ	ナデ・ハケ ハラケズリ	赤良	にぶい黄橙 10YR7/3		底部 1/12		016-1
172	土師器	罎	G10e6 包含層	帯定口径 155 器高 13	外面 ナデ	ナデ	赤良	にぶい黄橙 10YR7/4		口縁部 1/12		018-8
173	土師器	罎	G10g5 包含層	帯定口径 224 残存高 18	外面 ナデ	ナデ	赤良	にぶい黄橙 10YR7/4		1/12	外面に煤付着	014-5
174	土製品	土師	F10y5 包含層	長 66 幅 23 孔径 0.35	外面 ナデ	-	赤良	にぶい黄橙 10YR7/3		1/12 未測	重さ 2614g	024-8
175	瓶蓋器	杯蓋	G10a6 包含層	帯定口径 113 残存高 25	外面 ナデ	ロクロズリ・ロクロナデ	赤良	黄灰 2.5Y6/1		口縁部 1/12	外面に自然煤付着	015-2
176	瓶蓋器	杯蓋	F10y6 包含層	残存高 14	外面 ナデ	ロクロナデ	赤良	灰白 5Y7/1		口縁部 1/12 未測		025-2
177	瓶蓋器	杯蓋	G10a5 包含層	残存高 17	外面 ナデ	ロクロズリ・ロクロナデ	赤良	灰黄橙 10YR6/2		口縁部 1/12 未測		014-9
178	瓶蓋器	杯蓋	G10a5 包含層	帯定口径 173 器高 34	外面 ナデ	ロクロナデ・ロクロズリ	赤良	灰黄 2.5Y7/2		口縁部 3/12		007-3
179	瓶蓋器	杯蓋	G10e6 包含層	帯定口径 18 残存高 25	外面 ナデ	ロクロナデ・ロクロズリ	赤良	灰黄 2.5Y6/2		口縁部 2/12	外面に自然煤付着	007-5
180	瓶蓋器	杯蓋	G10g2 包含層	帯定口径 38 残存高 17	外面 ナデ	ロクロナデ	赤良	灰 7.5Y5/1		口縁部 1/12	外面に自然煤付着	015-1
181	瓶蓋器	杯	F10y4 包含層	帯定口径 66 残存高 14	外面 ナデ	ロクロナデ	赤良	浅黄 2.5Y7/3		底部 4/12		025-1
182	瓶蓋器	杯	G10a5 包含層	残存高 2	外面 ナデ	ロクロナデ	赤良	黄灰 2.5Y5/1		口縁部 1/12 未測		022-1
183	瓶蓋器	瓶	G10g5 包含層	残存高 5.5	外面 ナデ	ロクロナデ	赤良	黄 2.5Y6-2		口縁部 1/12 未測	内面・外面に煤付着	015-4
184	瓶蓋器	高杯	G10g5 包含層	残存高 2	外面 ナデ	ロクロナデ	赤良	灰 5Y6/1		底部 1/12 未測		014-8
185	瓶蓋器	高杯	G10g5 包含層	帯定口径 85 残存高 33	外面 ナデ	ロクロナデ	赤良	灰黄橙 10YR5-2		底部 2/12	内外面に自然煤付着	015-3
186	陶器	皿	G10g7 包含層	帯定口径 75 器高 18	外面 ナデ	ロクロナデ・糸割肌	赤良	灰黄 2.5Y6/2		口縁部 2/12		014-3
187	陶器	山茶椀	G10g5 包含層	帯定口径 153 器高 53	外面 ナデ	ロクロナデ・貼付高台	赤良	灰黄 2.5Y7/2		底部 1/12	内外面に自然煤付着	014-4
188	陶器	山茶椀	G10g5 包含層	帯定口径 76 残存高 23	外面 ナデ	糸割肌	赤良	浅黄 2.5Y7/3		底部 3/12		014-2
189	陶器	鉢	G10g5 包含層	帯定口径 138 残存高 39	外面 ナデ	ロクロナデ	赤良	灰黄橙 10YR6-2		底部 3/12	内面磨耗	014-1
190	石製品	砥石	G10g5 包含層	残存長 67 残存幅 27 厚 1.7	-	重さ 43.37 g、石材 砂岩 土盤を使用、1面に摩擦痕	-	-		-		033-1
191	弥生土器	壺	F10a6 整地層	残存高 36	外面 ナデ	ナデ・黄緑沈澱	赤良	にぶい橙 7.5YR6/4		-		026-7
192	弥生土器	壺	G10g5 整地層	帯定口径 54 残存高 53	外面 ナデ	ナデ・ハケ 工具ナデ	赤良	にぶい黄橙 10YR7/4		底部 4/12		020-3
193	弥生土器	壺	F10a6 整地層	残存高 15	外面 ナデ	ナデ・割目	赤良	にぶい橙 5YR6/4		口縁部 1/12 未測		026-5
194	弥生土器	甕	G10a7 整地層	残存高 52	外面 ナデ	ナデ・ハケ ハケ・ハラケズリ	赤良	にぶい黄橙 10YR6/4		口縁部 1/12 未測		026-6

第Ⅱ-7表 第200次調査 遺物観察表5

番号	部種	部形	遺構	法量(m)	調整・技法の特徴	粘土	構成	色調	残存度	備考	登録番号
195	土師器	高杯	F10y7 整地層	部定成 残存高 9.7	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	靑 75YR6/6	底部 1/12		028-3
196	土師器	杯	G10b6 整地層	残存高 2.9	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	明黄緑 10YR7/6	口縁部 1/12 未満		021-1
197	土師器	杯	G10g2 整地層	残存高 3.9	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	にぶい靑 75YR7/4	口縁部 1/12 未満		020-1
198	土師器	甕	F10y6 整地層	残存高 3.5	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	浅黄緑 10YR8/4	口縁部 1/12 未満		021-4
199	土師器	甕	F10a6 整地層	残存高 4.8	外面 ナデ 内面 ナデ・ハケ		密 良	にぶい靑緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未満		027-3
200	土師器	罍	G10b6 整地層	残存高 2.4	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ		密 良	にぶい靑緑 10YR7/4	-	土管小?	021-3
201	土師器	罍	F9a25 整地層	残存高 1.9	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	浅黄緑 10YR8/3	-	割棄小?	021-2
202	土師器	罍	F9a25 整地層	残存高 1.9	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	にぶい靑 75YR7/4	口縁部 1/12 未満		026-4
203	須恵器	杯蓋	G10g3 整地層	残存高 2.4	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ		密 良	暗灰青 25Y5/2	口縁部 1/12	外面に自然釉付着	026-1
204	須恵器	杯蓋	G10g3 整地層	残存高 2.9	外面 ロクロナデ・ロクロナデ 内面 ナデ・ロクロナデ		密 良	灰黄 25Y6/2	-		025-10
205	須恵器	杯蓋	F9a25 整地層	残存高 1.1	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ		密 良	灰黄 25Y7/2	口縁部 1/12 未満	内面に自然釉付着	026-3
206	須恵器	豆	F10a6 整地層	部定成 残存高 1.5	外面 ナデ・カキメ 内面 ロクロナデ		密 良	灰黄 25Y6/2	腹部 2/12	外面に自然釉付着	020-6
207	須恵器	御飯 内面鏡	G10g2 整地層	部定成 残存高 2.4	外面 ロクロナデ・長方形通かし 内面 ロクロナデ・長方形通かし		密 良	灰 75Y4/1	-	通かし 2 段以上	025-9
208	須恵器	御飯 内面鏡	G10a7 整地層	残存高 4.1	外面 ロクロナデ・カキメ・ 長方形通かし 内面 ナデ・ロクロナデ・貼付高台		密 良	灰黄 25Y7/2	底部 1/12 未満	通かし 2 段以上 上・外面に自然釉付着	020-7
209	陶器	山茶椀	G10g3 整地層	部定成 残存高 1.4	外面 薄切肌 内面 ロクロナデ		密 良	灰黄 25YR6/2	底部 3/12	内面に自然釉付着	020-2
210	陶器	山茶椀	G10a7 整地層	部定成 残存高 1.8	外面 ロクロナデ・貼付高台 内面 ロクロナデ		密 良	浅黄 25Y7/3	底部 4/12	内面摩耗	020-5
211	陶器	皿	G10b6 整地層	部定成 残存高 1.9	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ		密 良	灰黄 25Y6/2	口縁部 2/12		020-4
212	石製品	洞片	G10b6 整地層	長 3.2 幅 0.7 厚 0.6	長さ 127 ㎜ 緑色片岩	-	-	-	-		034-9
213	金属製品	鍔治沖	G10a6 整地層	長 8.8 幅 8.7 厚 4.5	長さ 382 ㎜	-	-	-	-		035-1
214	織文	鉢	G10g2 表土	部定成 残存高 1.28	外面 ナデ・工具ナデ 内面 ナデ・工具ナデ		密 良	灰黄緑 10YR6/2	口縁部 1/12	内外面に保が 吸着し光沢あり	029-4
215	衛生土部	皿	F10y4 表土	残存高 4	外面 ナデ・施施泥襷・貼付突帯 内面 ナデ		密 良	灰黄緑 10YR5/2	-		029-5
216	衛生土部	皿	G10a4 表土	成澤 残存高 3.3	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	にぶい赤靑 5YR5/4	底部 6/12		029-6
217	土師器	甕	F10y4 表土	部定成 残存高 1.52	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ・ハケ		密 良	にぶい靑 75YR6/4	口縁部 1/12		026-9
218	土師器	甕	F10b6 表土	部定成 残存高 1.78	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ・ハケ		密 良	にぶい靑緑 10YR7/3	口縁部 1/12		027-4
219	土師器	甕	F10y6 表土	部定成 残存高 1.67	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ		密 良	靑 75YR7/6	口縁部 1/12	外面に煤付着	027-2
220	土師器	甕	G10a4 板瓦	残存高 4.8	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ・ハケ		密 良	にぶい靑 10YR7/4	口縁部 1/12 未満		029-7
221	土師器	把手	G10a4 板瓦	残存高 8	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	にぶい靑 75YR7/4	-	瓶又は罎	029-1
222	土師器	杯	G10a4 表土	部定成 残存高 1.21	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	靑 75YR6/6	口縁部 1/12		026-8
223	土師器	杯	F10y4 表土	残存高 2.9	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	靑 75YR6/6	口縁部 1/12 未満		028-1
224	土師器	杯	G10g2 表土	残存高 3	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	にぶい靑緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未満		029-2
225	土師器	杯	G10g2 表土	残存高 2.7	外面 ナデ 内面 ナデ		密 良	にぶい靑緑 10YR7/4	口縁部 1/12 未満		029-3
226	須恵器	杯蓋	F10y4 表土	部定成 残存高 1.02	外面 ロクロナデ・ロクロナデ 内面 ロクロナデ		密 良	25Y6/2	口縁部 1/12		028-5
227	須恵器	豆	G10b6 表土	部定成 残存高 1.28	外面 ナデ・ロクロナデ 内面 ロクロナデ		密 良	灰黄 25Y6/2	底部 2/12		028-4
228	須恵器	豆	G10c6 表土	残存高 3.9	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ		密 良	暗灰青 25Y5/2	口縁部 1/12 未満		028-6
229	白磁	碗	G10b6 表土	部定成 残存高 1.7	外面 ロクロナデ・ロクロナデ 内面 貼付高台 ロクロナデ		密 良	釉・青白釉 989 生施・灰黄 25Y7/2	底部 5/12	内面に施釉	028-7
230	石製品	砥石	第 190 次 埋戻土	残存長 2.5 残存幅 0.9	長さ 818 ㎜、石材 3 面全使用	-	-	-	-		033-2

第Ⅱ-8表 第200次調査 遺物観察表6

写真図版 1



1区 調査区全景 (南東から)



4区 調査区全景 (南東から)



3区 調査区全景 (南東から)



SB 11360 (北東から)



SA 6280・SB 11501 (北東から)



SB 6281・SB 11500 (南東から)



SB 11361 (北から)



SB 11362 (北東から)



SZ 11354 土層 (南東から)



SZ 11357 土器出土状況 (東から)

写真図版 3



SA 6280 P 7・8 土層 (北西から)



SA 6280 P 11 ~ 14 土層 (北東から)



SA 6280 P 9・10 土層 (北西から)



SA 6280 P 11 土層 (北西から)



SA 6280 P 12 土層 (北西から)



SA 6280 P 14 土層 (北西から)



SB 11501 P 1 土層 (北西から)



SB 11501 P 2 土層 (北西から)



SB 11501 P 3土層 (東から)



SB 11501 P 4土層 (南西から)



SB 11360 P 7土層 (南東から)



SB 11360 P 9土層 (南東から)



SB 11360 P 10土層 (東から)



SB 11360 北廂P 1土層 (南東から)



SB 11360 北廂P 2検出状況 (南東から)



SB 11360 北廂P 2土層 (南東から)

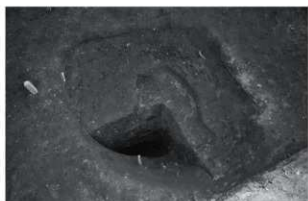
写真図版 5



SB 11360 南廂P 6土層 (南東から)



SB 11361 P 7・8土層 (南東から)



SB 11361 P 10土層 (南西から)



SB 11362 P 4土層 (南東から)



SB 6281 P 4土層 (北から)



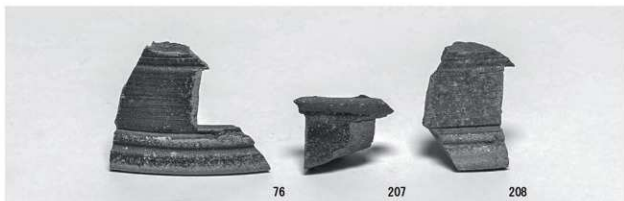
SB 6281 P 5土層 (北から)



SB 11500 P 3土層 (西から)



SB 11342 P 16土層 (西から)



写真図版 7



報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと れいわさんねんどはくつちようさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 令和3年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小原雄也							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2023年3月22日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
さいくうあと 斎宮跡	たきごんのいわらちよう 多気郡明和町 さいくう たりがわ 斎宮・竹川	24442	210	34° 31' 55" ～ 34° 32' 30"	136° 36' 16" ～ 136° 37' 37"	20210901 ～ 20220131	296㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
斎宮跡 第200次	官衙	弥生・古墳・ 飛鳥・奈良・江戸		方形周溝墓・ 掘立柱建物・ 掘立柱塀・ 門・溝・土坑		縄文土器、弥生土器、土 師器、須恵器、陶硯、白 磁、陶器、陶磁器、土製 品、石製品、鍛冶滓		飛鳥時代の中核 域（斜方位区画 の北部、西部）
要約	<p>飛鳥時代の斎宮中核域と推定される範囲で発掘調査を実施し、斜方位区画の北辺・西辺を構成する掘立柱塀、西辺の掘立柱塀に取り付く四脚門、正殿と推定される東西棟の両面扉付掘立柱建物、西第一堂・西第二堂と推定される南北棟の掘立柱建物等を確認した。</p> <p>平成29年度から令和3年度にかけて実施した、当該地区の調査により、飛鳥時代の斜方位区画や食院の規模や構造、変遷等に関する詳細な成果を得ることができた。</p>							

史跡 齋宮跡

令和3年度

発掘調査概報

2023年3月22日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 株式会社アイブレン
